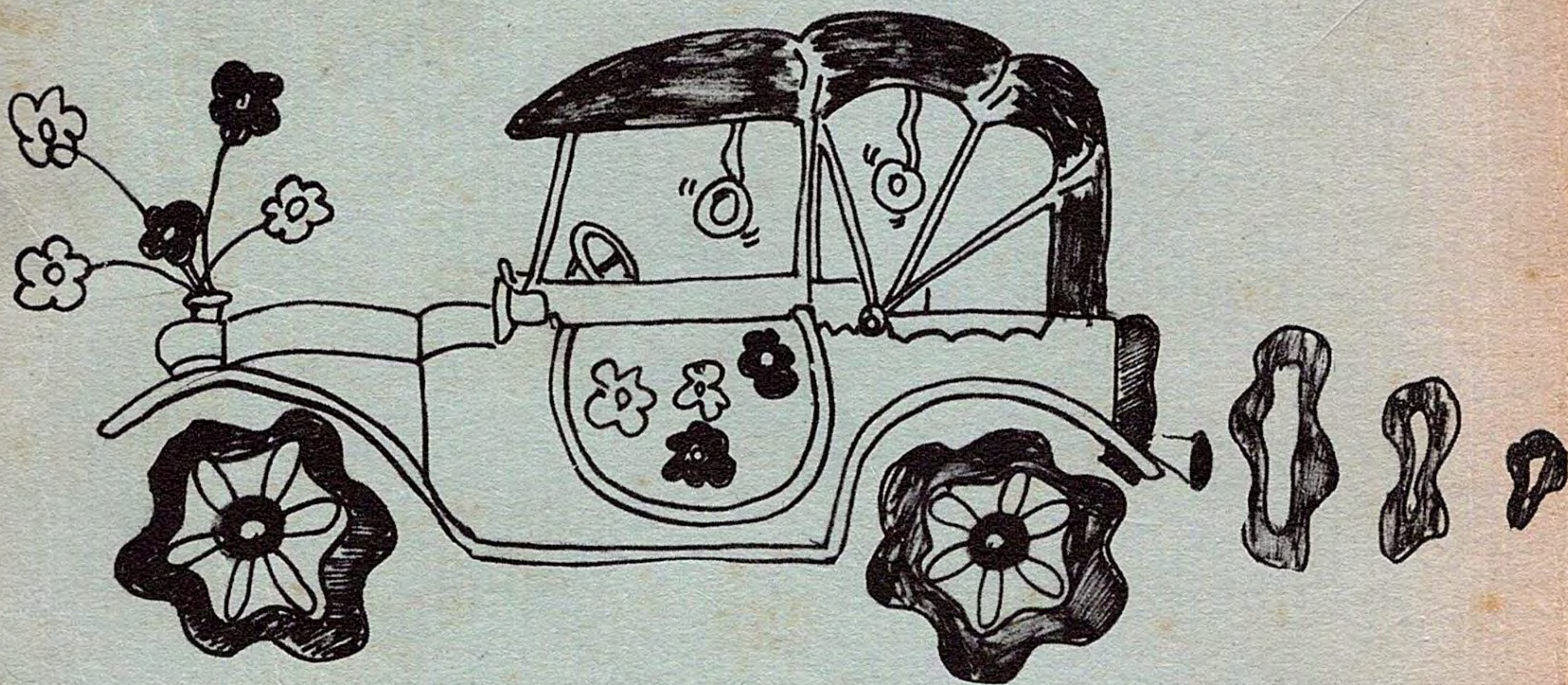


MG

第 3 号

1973 ⇒ No. 3

明治学院大学自動車部



MG

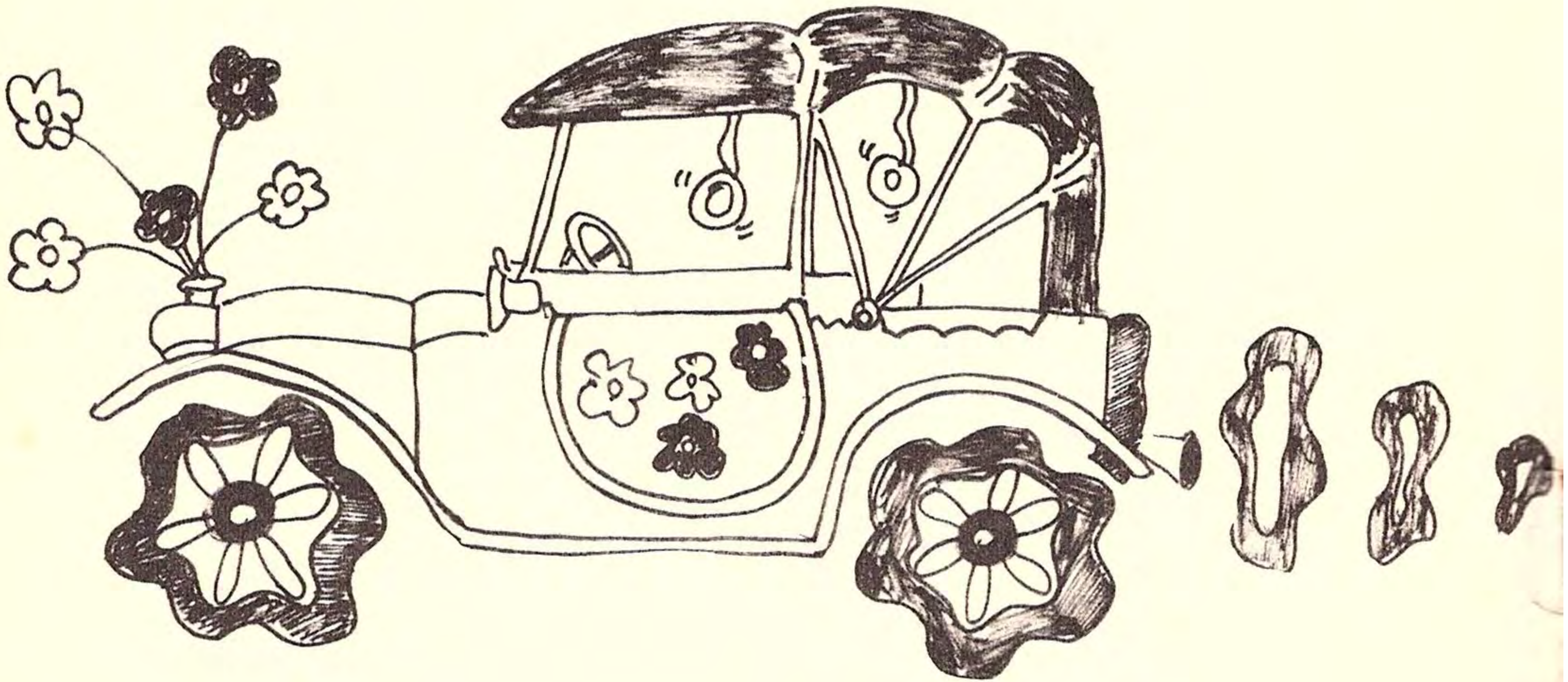
第 3 号

1973 ⇒ No. 3

明治学院大学自動車部

0958

217.2120.



目次

あいさつ	加 藤 堅 司	1
あいさつ 優勝に思う	高 橋 良 次	2
部車紹介		3
部ができたころの 昔ばなし	高 橋 賢 一	9
無題	池 田 邦 夫	1 0
アア、第七チェック	小 林 征 而	1 1
自動車部歴史の一編	羽 田 親 蔵	1 3
全日本学生自動車連盟	小 原 豪 裕	1 4
自動車との出会い	加 藤 丈 人	1 6
情熱・理想・信念を持って	福 本 喜 保	1 6
記録映画を顧みて	谷 崎 洋一郎	1 7
Y 字路	紺 野 英 雄	1 8
雑感	松 島 初 代	1 9
一年の夏合宿の思い出	明 石 敏 夫	2 0
無題	加 藤 堅 司	2 5
フィギア雑感	原 悦 子	2 5
私のみた自動車部	小 林 由紀江	2 6
会計として	村 里 忠 充	2 7
無題	高 橋 功	2 7
耐久走行レース出場記	井 上 幸 二	2 9
自動車部の四年間	山 本 俊 介	3 1
卒業とクラブと私	及 川 せい子	3 1
山中湖一周	正 田 一 明	3 2
祝勝会の思い出	木 村 真	3 3
無題	岡 部 由美子	3 4
全日フィギア	高 橋 良 次	3 5
整備大会	中 原 晴 次	3 6
無題	宝 積 誠 次	3 6
学連での一年間	間 宮 晴 正	3 7

自動部に期待するもの	中 川 豊 実	4 3
無題	木住野 江律子	4 3
無題	土 屋 長 之	4 4
入部記	土 田 貞 之	4 5
入部回想記	倉 茂 孝 子	4 6
夏合宿回想録	渋 俗 義 孝	4 7
合宿記	長 島 きみ子	4 7
クラブについて	福 島 正 明	4 9
合宿の一日	原 田 博	4 9
四十七年度成績	5 5
自動車部規約	5 6
名簿	6 2

あいさつ

七十二年度 主 将 加 藤 堅 司

最近、どの大学においても、体育会の部員が激減しているという大きな問題をかかえている。我部もその例にもれず、かつて体育会一の部員数をほこっていたにもかかわらず今や四十名たらずで、その部員数の減少に、現在、頭をなやましています。

さらに、ラリー等にみられる競技面の問題、社会における自動車の存在そのものに対する様な根本的な問題等々、現在の自動車部は一つの過度期をむかえていると思います。そういう中で我々が全関東総合優勝を勝ち得たということは、一つの意味を持つものであり、さらに、これをきっかけに、自動車部を前進させていきたいと願っております。

最後に、このMG第三号の発刊にあたってOB並びに諸先生方に多大なる御協力をいただきまことにありがとうございます。

無事発刊の段にいたしましたのも、ひとえに皆様方のおかげと深く感謝している次第です。

挨拶

全関東総合優勝に思う

七十三年度

主

将高橋良次

我自動車部が、今年度男女共に全関東総合優勝を遂しとげ、学内では体育会最優秀クラブ賞に選ばれ、その他いろいろな榮譽を勝ち得た。

学生スポーツを通じてそれに情熱を打込み、さまざまな苦労や努力の積み重ねが、こういう榮譽を我部にもたらしたのである。

スポーツを愛好するものにとって、勝負に徹すること、勝つことは使命である。それが今回こういう形で勝利を味わうことができたことは記念すべきことであり、大いに意義がある。

しかし、手放して喜んでいられないのが現状である。部員数の減少や活動上の問題は多く残されたままである。こういう問題を置きざりにしては優勝のことは語れない。

とにかく人間は苦しいものから逃避し、自己容認で享樂的な方へと走りやすい。この時点において、体制的とか無気力になりやすい。もっと情熱を持って、より積極的にクラブ生活に臨んで欲しい。部員みんなの手で自動車部というものをもり立てて行きたいと思う。私は部員にこう提言したい。

最後に創立来、諸先輩方の築いてくださった伝統と、この全関東総合優勝という成績を踏み台として自動車部を発展させ、より充実したクラブにして行きたいと思う次第である。

部 車 紹 介



A 三菱ふそう

我が自動車部のドル箱車。練習よりアルバイトで使う方が多い？その期待に答えてか調子はバグン！バッチリ稼いで下さい。

最新鋭の部車で四十七年度全関東ラリーで活躍。調子がよいのはもちろん、ルックスもバグン。部員の中でも一番人気があり、シャープな走行性にはシビれます。



B サニー



C ダットサン

部車の中でもトップクラスの信頼性。どんな寒い朝にも始動一発。人も荷物もたくさん運べます。

たよりにしてまっせ。

部車になってまる二年、すばらしい気品と風格はいっそうみがきがかかって見えます。汚れた服装での乗車は御遠慮願います。耐久性の方もアメ車だけあってサスガ！
百Km/hは軽く出そうです。



D ポンティアック・テンペスト



E セドリック

一二八のゼッケンを背負って幾歳か、少々疲れが出てきたようです。もうじき定年、最後まで立派にお役目果して下さい。



F ブルバード

四十五年度全関ラリー優勝車。歴戦のマシン。四十六年度全関ラリー、全日ラリー、女子ラリーでも大活躍。四十七年に入って、部員の手によりオーバーホールを受け、耐久走行レースにそなえてパーアップ。今だ健在。これからの一層の活躍を期待します。

今まであらゆる酷使に耐えてきましたが、ただ今休業中。また酷使させていただきます。カギをロックできないほど部員に乗ってほしいという部車ですからきっと許してくれるでしょう。



G コルト



H エルフ

車検はないけれど無類の潜在性を秘めた車。ミッションが調子悪く、ポルシェタイプのフニャフニャしたシフトフィーリング。でも外観。エンジン共極上の掘り出しもの。



I クラウン

フィギアの練習でさんさんこき使われたのに車検が切れてもう廃車。しばらくはゆっくり休んで下さい。またの合宿で活躍をおねがいします。

合宿での酷使がたたってか、いろいろ不調をきたし、部員の手によりただ今大修理中。次の合宿までには車検をとり、フィギアに無免練習に部用に巾広く部員がお世話になります。

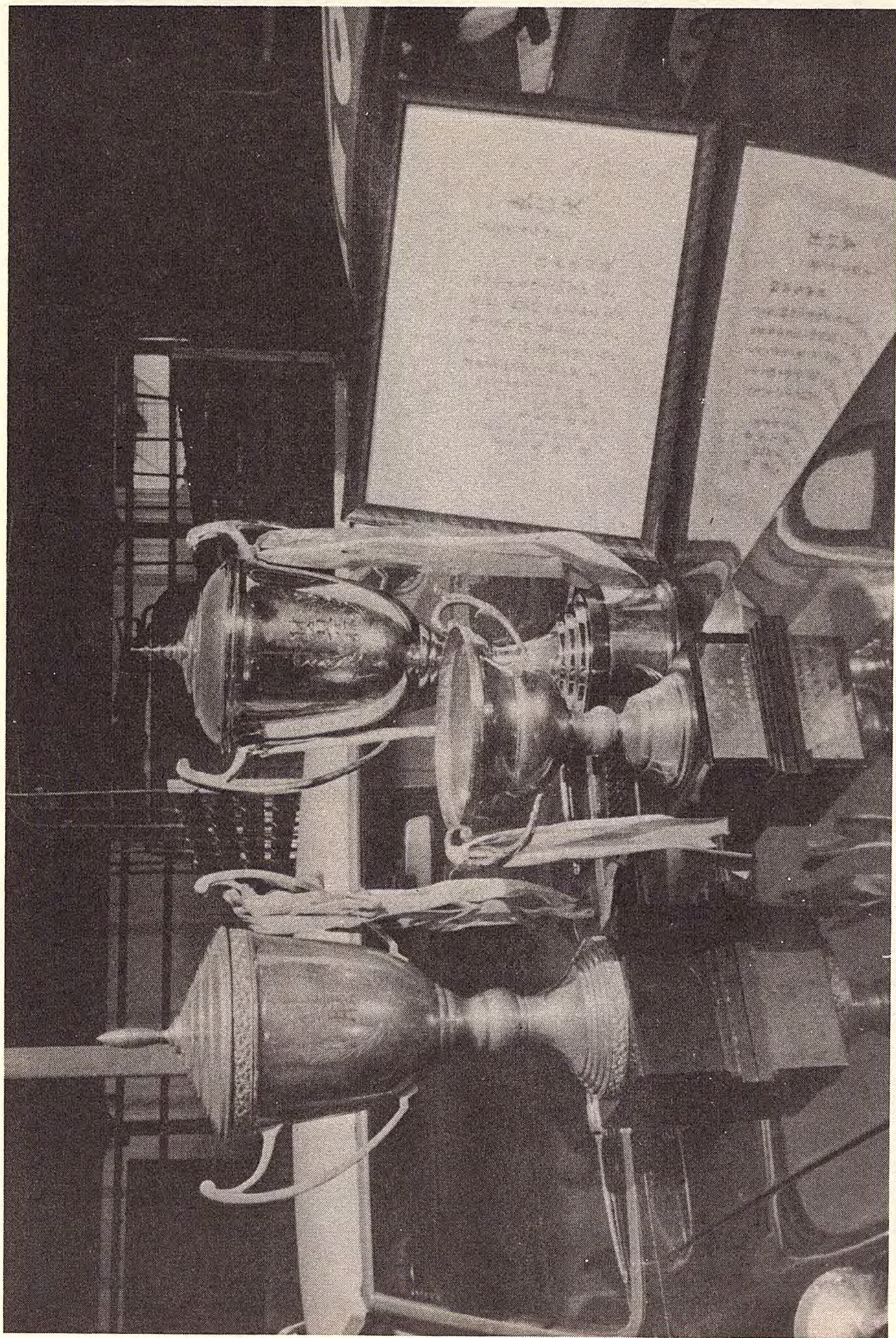


J セドリック 130

ラリーメイト求む！

地図見係、運転係、計算係
腕に自信のある若者は、来たれ、
当方、車、計算機、諸設備あり、

Tel 473-1080 ラリーおじさん 岩垂英二





部が出来たころの

むかしばなし

自動車部長 高橋 賢 一

もう何年前になるか、遠い昔の話である。当時体育会の委員長をやっていた林君が、やって来て「相談があるんですが、実は自動車のいゝ出物があるんです——うちの学校にも自動車部があってもよいと思うんです——で車を買いたいんですが」と云う相談であった。

当時私も若くて、運動部が活躍すれば、活動が新聞に出る。高校生が新聞を見ると、先づスポーツ欄を見る、広告のところにも他の大学とならべて広告するよりも、スポーツの欄に出るのが効果がある、大学は運動部の活動をもっと盛んにして、宣伝する必要がある等当時としては、まわりの人々がおどろく程鼻柱の強い主張をしていたので、自動車部をつくることに大賛成だった。

これより少し前自動車部の話が出る数年前に体育会を結成したのだが、個々の部の活動には限度があるから、連合体としての体育会をつくろうと、連日相談し、ラグビー部の飯島君を初代の委員長にして発足した。

当時経済的なことや学生問題等もあるのでドイツ語の加藤七郎先生に、会長になっていただいた。結成するために、各部の人集めの相談等が面白く印象に残っている。

この辺の舞台うらを、野球部の望月君が引きうけて、連日大活躍をした。現在は山甲製作所の所長となり、学院の同窓会選出の理事として、今も学院のために、活躍していてくれるわけだ。初代

飯島君からバトンタッチした2代目体育会委員長林君の着想から自動車部は発足した。

相談に乗った第1歩はまず自動車購入資金の問題であった。当時としては一寸大金であったので、総主事をしていた松本享先生を部長にするのがよいと考え、松本先生のところに話しに行った。先生はアメリカからきたばかりで張切っていた時代なので、アメリカの自動車の話を聞かせてほしい、と話をもってゆくと出るは出るわ、段々大学生と車の話に持っていくって先生の結論を、今の明治学院大学の学生にも自動車の正しい知識——技術が必要であると云うところに引っぱって行った。最後に自動車部を作りたい。については、部車購入の金を出してほしい、と切り出したが先生は仲々渋くて、よい返事がもらえなかった。

何回か交渉して学院から借金して購入することにした。それが初代の部車で三越の店長が乗っていた“ビュック”で、当時は仲々貫録のある立派な車であった。交渉した林君は現在は信越放送の幹部で大活躍をしている。

数年たってから松本先生からこの借金を返せと云われて困った等、現在自動車部OB会長の土倉君の話も、もう遠くなつかしい。

溝の口に在った学院の寮の土地の代替地として、東村山グラウンドを購入することになって、初めて東村山を見に行ったのが、この初代の部車であった。途中、田無の付近で米軍の戦車を輸送中のトララーの間にはさまってしまい、米兵が前から話しかけて来たりした。遠い遠い昔の話である。

この時代から種々相談に乗っていた関係で、初代部長松本先生が多忙になったので、2代目部長を引きうけたわけだ。

私の代になってからも種々な思い出が山程ある。自動車部は他のクラブの面倒を見ている場合よりも、意外なほど鮮やかな思い出が残る部だと思う。

最近はどこに行っても、お宅の自動車部はしっかりしている。部が使ったあとのあとかたづけがきれいでとほめられてくすぐったく思うことがたびたびだ。初代の部車置き場が高校の教室のそばだったので、高校から「うるさい」「きたない」と苦情が来て困った。新しい幹部が決るたびに注意したが、仲々なおらなかったのだが……。名前を忘れたが女子の幹部でよくやる人が出て以来、ものが見事に「キレイ」になり、それが伝統になってしまった。

今はもう事故の時のための保険の心配だけで、他に心配がなくなってしまった。その保険も学生部で前例になってやってくれるので感謝している。先輩は多忙の中を実によく面倒みてくれて有難い。現役も成長してあまり心配しなすむ様になった。私も多忙になったのだが、あまり手がかからないのも有難いやら淋しいやらだ。それにしても今回の総合優勝はうれしかった。何しろ暗いことが続いた。暗い暗い長いトンネルを出て、一寸目がくらみそうな感じで嬉しかった。

先日の八芳園の集りのたのしかったこと。煙草を吸わない私にライタープレゼント。又、それを知っていて心配してソット声をかけてくれる先輩。もう涙が出そうに嬉しくて、物ではない心なんだと身にしてみうれしかった。今年も何にもしてあげられなかったのに——あの先輩は——嫁さんは——どうなっているのだろう——。先輩からも近況がききたい。

無 題

自動車部監督

六二年度生 池田 邦夫

月日のたつのは早いもので、私も卒業して今年で八年目を迎えようとしております。

卒業以来現在では自動車の販売という仕事をしております。在籍中には四年間というものは全く部活動以外は手をつけずに色々な行事を経験して来たわけですが、入社以来やはり入部した時分の事が想い出されます。

私はその頃は自動車に興味を持っておりませんでした。免許はありませんでしたし、又部活動の内容も全然知りませんでした。ただ自動車部に入れば免許は取れるのではないかと思っはいました。

四月に入部して以来、体育会自動車部は甘くなく、「車は押すものである」かの様に毎日押しがけばかりで、自分でハンドルをにぎる事が出来たのは夏の合宿でした。

一年生15名が合宿に参加しましたがその中で免許を持っていたのは3人だけでしたので意を強くし、何とか最初に取ってやろうと張り切ったものです。

自分達は免許を取りたい一心で、危い事も忘れて相当無茶な運転をしていた事だろうと当時の先輩の事を思い恐縮しております。

私が会社に入りましてからも、会社の性質上、免許証は必ず必要

な条件の一つですが、免許を持っていたとしても、運転はさせてもらえず何ヶ月間は先輩に、商品としての車の扱い方、運転の仕方という事で相当きびしいテストをされた事がありますが、幸いにも四年間の学校での経験がものを云ったのか、一回のテストで合格し社内運転許可をもらったのを思い出します。その後は逆に新入社員に対して教える立場となった訳ですが、学校時代と同じで、素性の分らない人間の運転はこわいものだとして改めて私が無免許の時に先輩方が経験した（私も経験しました）様に感じたものです。

実際に物を教えるという事は、（運転に限らず）難かしい事だと思います。

現在の仕事の中でも良く問題にされる事ですが、知っていると言う事を教えると言う事は簡単な事ですが、相手に自分の気持ちを百％伝え、分ってもらえる迄になるには大変な苦労があるはずで

個人個人によって表現力だとか説得力だとか、その能力には差があります。時間をかけ同じ事のくり返しを続ける事によって解決はするでしょうか、スピード時代の今日では、その様な、のんびりとした方法は通用しなくなっています。いかに早く覚えさせ又教えるか、と言う事が最近特に感じられ、今の時代に必要であるかという事を考えます。

以上



アア、第七エック

五九年度生 小林 征 而

スタートはかなり雨が降っていた。私達の車はゼッケン28である。いよいよ二十二日間にわたるレースが始まった。このラリーは全日本自動車連盟が十周年を記念して朝日新聞、日産自動車、警視庁、各都道府県等が後援し又三年後に開催される東京オリンピックのデモンストレーションと各都道府県知事にメッセージをリレーする等の目的で行なわれるものである。出場校は全国四ブロックの予選を通過した精鋭三十五校である。

レースは三ブロックに別れ第一ブロックは東京を出発水戸、仙台、盛岡、青森、秋田、鶴岡、新潟で第二チームにバトンタッチ以後富山、福井、舞鶴、取島、松江、山口、福岡で第三チームが九州を熊本、大分とまわり広島、岡山、大阪更に東海道を上り名古屋、静岡東京と二十二日間にわたる大レースである。さて、トップバッター第一チームのメンバーはリーダーで計算係の河合先輩、同じく計算係の足木先輩通称ケンちゃん、又ドライバー兼ナビゲーターは西沢先輩通称トケちゃん和私である。車は日産自動車より貸与されたブルーバードP310型で夜間はラリーを行なわない為装備はノーマルである。

第一日目たいした波乱もなく水戸市に到着市内をバレードして県庁にて歓迎会の後旅館へ入る。何といっても多人数で各校四人の選手で一四〇人オフィシャル約五十人旅館は大変な騒ぎである。夕方

になるとロビーに成績が発表されるのであるが成績のいい学校は態度も大きく声もでかい、私達はこういうわけか態度も小さく声も小さい、明日がんばろうてな事を言い合って禁酒して寝る。

翌朝レース車は日産の工場にてガソリンを満タンにオイル及その他のチェックを終わっており我々が私物を持って乗車するのを待っている。

早稲田などは計算機を二台も持って来ていた。古来よりの五球の算盤を頼りに出場しているのは「我校他数校であった。我々は、あんな重いもの首から下げた画板の上に置いてガチャガチャ計算していたんじゃ二日もしたら首が痛くなってダウンだぞ」と互いになくさめ合う、二日目のレース展開はまあまあ出来であったがしかし他校の出来が良すぎるらしい。成績はあまり上らない。文明の利器のせいでなく根性がたりないのだと反省し禁酒、禁煙して三日目に備える。

当時のラリーは今の様に秒で競うということではなかった。一分おきにスタートして山間部の見晴しの良い所などは二三百メートルの間隔でレース車が並んでいるのが見える。なまじ計算するよりも双眼鏡で見ている方が確かである。明らかに装備不足、作戦の失敗である。しかしレースは根性だ。

レースは比較的平穩でレース車が前後したり激しく入り乱れるという事は少なかった。三日目第六チェックを通過した所で次の指示速度の変更が交通標識である事をナビゲーターが確認、私はメーターと道路標識を交互に見ながら走行、市街地に入った。みんな手を振ってくれる小さな子供は朝日新聞の旗を振っている。跳切があった。その先は工事中で車が数台止っている。工事中を200m程過ぎた

所で西沢先輩がどうも車のかげに標識があった様だという。車を止めて確認しようと思ったが暫く他校の様子をみる事にしてそのまま走行を続けた。ところが暫く走行するとレース車が乱れて来た。追いついて行く車、追い越される車、他校も迷っている様子だ。話合の結果工事中の所に標識があったことにして計算を修正する事にした。足木、河合両先輩が懸命に計算のやり直しをするが道が悪くなって車が揺れるし又指示速度が変わる。五球算盤はガチャガチャである。気持が焦って来る。わら半紙に掛算一つすると丸めて床へポンだ。能率がぜんぜん上らないしもう他校なんか気にしている余裕はない「あっチェックだ第七チェックだ」大量減点である。

盛岡の町にはあまり大きな旅館がないので三つに分れて泊った。旅館の中は比較的静かであった。さすが三日目になると多少の疲れが出たのか皆んな黙っていた。暫くして河合先輩が「小林、足木はどうした」「風呂じゃないですか」どうも風呂じゃないらしい。一時間位して足木先輩が帰って来た。何と頭が丸坊主である。床屋へ行っていたのだ。こりゃあまずい足木先輩だけ頭を刈らすわけにはゆかない泣く泣く残り三人も床屋へ出かけた。私は何とも決心がつかず未練の五分刈りである。禁酒、禁煙、五分刈り頭で寝る四日目が恐しい。

青森、秋田、鶴岡、新潟といくらか挽回したものの三日目の第七チェックが災いして三十五校中二十八位で第二チームの更科、近藤、大西、福田の四先輩にバトンタッチ健闘を祈って新潟を出た。

自動車部の歴史の編

山中湖湖北寮

羽田 親蔵

振り返れば歴史は一言に尽きる様に考えられるが、良くその時その時を手操り思出せば又長い年月であった。自動車部の歴史と言えば、先ず頭に浮かぶのは自分自身の過去が想い出されてならない。今から十八年前に山中湖に明治学院大学湖北寮として現在の寮を新設し明治学院の学生諸君の色々な思い出の場所として歩み現在に至っている訳です。その中でも一番思い出深く又親しく懐しいクラブと言えはなんとしても自動車部であり、寮が出来て以来毎年合宿し部活動の一環の場所として我が家の様な気持で利用して下さっているし、私共も常にその様な気持で何かにつけて依存して居る訳です。十七、八年前に合宿に来た時を一寸振り返って見ると、あの頃は車が二台で今日の車と違ってやっと動く程度の車で、東京を朝出発して夕方山中湖に着いたものです。勿論今の道とは違い道路も悪く、到着するまでが一苦労したものです。従って当時は自動車も珍らしく、合宿と言っても運転出来る様に練習するのが精一杯であった様に記憶して居ます。その頃は競技と言う事はなかったのではないかと思います……後になって出来たように感じますね。私などもその頃は一生に一度自分の手で自車車を動かして見たいなんて考えたものです。それから年を重ねるごとに車は急増し、身近に所在する様になり、今では各家庭の必需品と言うか人の足の様にまで言われる時代へと進んで来た訳です。今考えると、まるで夢の様なもの



賞品付記念発売のお知らせ

このマークは御存知ないでしょう！

然しポルシェは御存知でしょう。テキスター

社はポルシェ、ベンツ、BMWのブレーキパッド、

ライニングの西独最大のメーカーです。テキスター

社と当社と共同企画で、ポルシェ911Sのブレーキパッド

と同一材質で国産車用を新発売致します。

入荷4月末（予定） 国産車各種

ブレーキは重要保安部品です。世界の一級品で安心感を持って楽しいドライブをどうぞ！

詳細は4月号 オート・スポーツ、オート・テクニクを御覧下さい。

ドイツ：テキスター

英国：フェロード

総発売元

(株) 芝ライニング商会

港区東麻布1の8
03(582) 9761

す。現代の人達に話せば笑い話位の様に感じるかも知れません。時の流れは速い様に感じるけれど、一つ一つたどれば多種多様に変化して、現在を形成して居る訳です。山中湖も当時から見れば大部変って来て居ますし、それと同時に学生諸君も、前の人達とは色々な意味で変って来て居る事は、否定出来ない事だと思います。今一寸年代別に振り返って見るに、大きく分けて六十四年度生位を限に前後する様に思います。又當時を限度に部員の数も頂点に達し、以後は減少の過程を辿り現在に至っては一時の半數位にも満たない部員数になっている現状です。ところで、この傾向は明治学院だけでなく

全国大学にみられる現象でもある訳です。昔の人達は自動車部に入らなければ車を動かして見ることが出来なかったものが大勢いたし、車に対する興味も有ったことは言うまでもありません。しかし、今では誰でも車を持ってゐるし、車に対する感覚が薄れて来て居る時代ですから学生全般の自動車に対する考え方、又は見方も自ら違つて来てもあたりまえだと言えるかと思ひます。ただ車を使って競技をしスポーツとして行ひ事は、昔も今も基本的にはなんら変わらないと思う。四年間部活動に専念した諸君が後輩を見る時、今の学生は、又、部活動は、何をやっているか解からない。練習を見てもどうにもならないと言う人が多く聞かれますがこれは先の人から後を見れば誰もが同じように見えるでしょう。しかしその当時者はそれが精一杯だと思ひこの様な言葉は、十八年前の人達から同じ様に口々に言い伝って来ている事は昔も今も変わらないと思ひます。例えば今の様に言われた人達がやがて卒業し先輩として指導者の立場から後の人達を見た時には、又同じ言葉が出ることは間違いないと思ひます。ただこゝで明治学院に入学し学生生活の中で自動車部に籍を置

き活動した事が何より良かった。又自分自身が卒業後に本当に悔を残すことなく自分の生涯においても四年間の部活動が忘れられないいつまでも心に残ると言つた事があれば、体験者として後に残る人達に良きアドバイスとして伝えて行つてほしいと思ひます。又常にその様な人が部員にいて欲しいと念願するものです。

全日本学生自動車連盟

六九年度生 関東支部委員長
小原 豪 裕

連盟とはいつたい何なのか、部員諸君の中にもまだ知らない人がいるかも知れない。

正式には、全日本学生自動車連盟といい昭和二十七年の発足である。

連盟は、各種の自動車競技や行事を主催し、組織は関東、中部、関西、九州の四支部に分かれている。全加盟校は百十八校で、わが明治学院大学の属している関東支部は、その中でも最大の三十八校を擁している。

関東支部連盟は、品川のJAF事務所内にあり、委員会の選挙による当番校、女子当番校次期当番校の三校により、委員長一名、副委員長二名、会計一名、常任委員六名の計十名で組織される。その運営にあたっては、当番校、女子当番校、次期当番校、前年度当番校と委員会の選挙による二校の計六校の運営校が補佐する。今年度運営校は、明治大学（当番校）、日本女子大学（女子当番校）、立教大学（次期当番校）、明治学院大学（前年度当番校）、東京理科

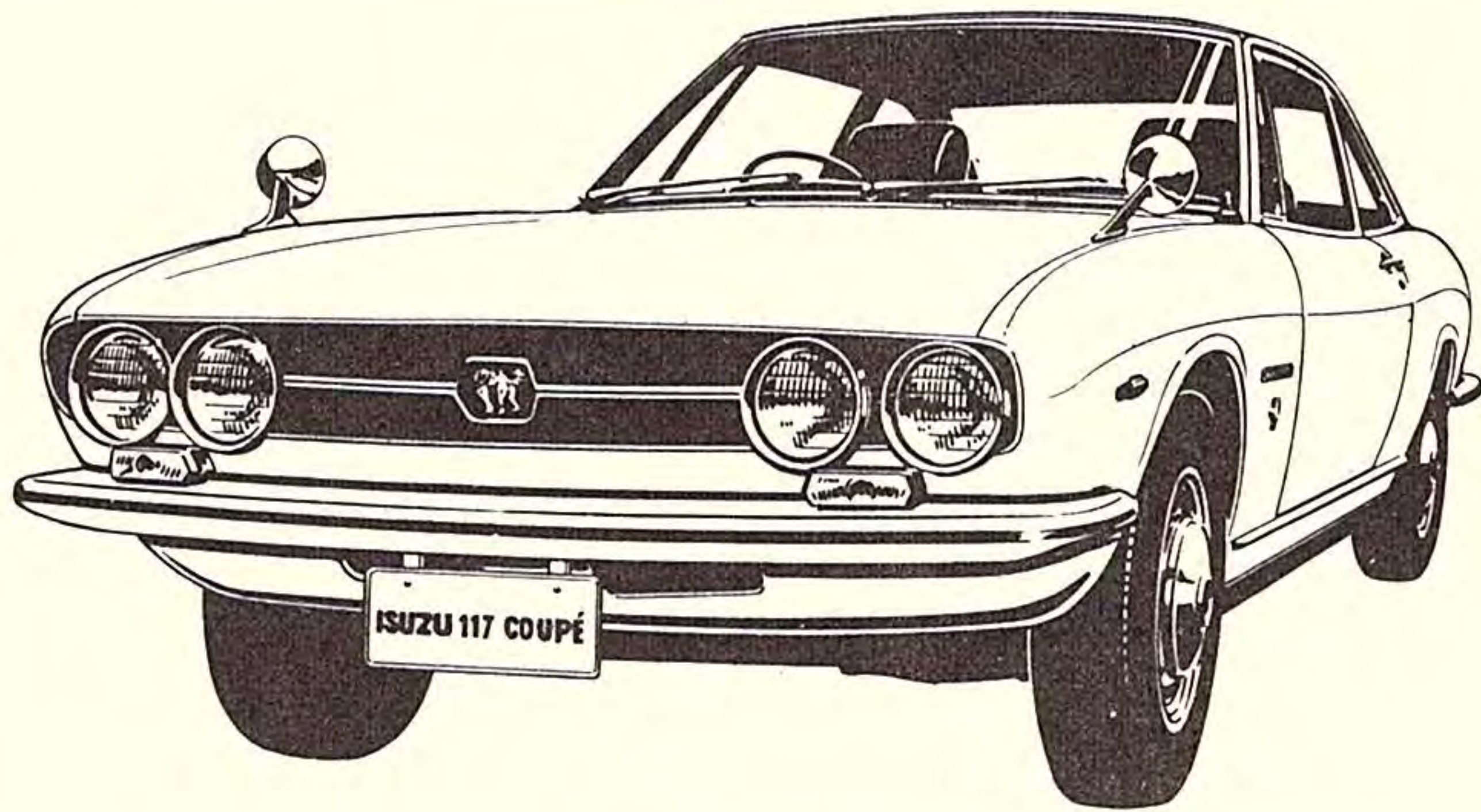
大学（日本女子大学補佐）、駒沢大学、早稲田大学である。

わが明治学院大学は、私の時、連盟第二十一代の当番校であった。この事は、諸先輩の築かれた輝かしい伝統を物語るものであり、我の誇りとするところである。

連盟の仕事は、先程述べた様に、各種の自動車競技や行事を主催することにある。が、それだけに止まらず、真のスポーツとしての学生自動車競技確立の努力も怠ってはいない。また自動車を媒体とする社会的活動を行なうこともやぶさかではない。

昭和四十五年秋、秋田先生の組織した、「全国学生交通遺児育英募金」運動を、第二回事務局より連盟が引き継ぎ、車の最大のデメリットである交通事故による犠牲者の救済に、連盟二十年の歴史と百十八大学の組織をあげてとりくみ、大きな世論を喚起した。この他、過去伊勢湾台風、新潟地震等で大活躍した災害救助隊も、全加盟校の部員、部車で組織され直ちに出勤出来る体制にある。

自動車部が部員減少に悩み、交通公害が叫ばれ、社会から見放されようとする今、運営校であり、昨年当番校の時、男子一部総合優勝、女子総合優勝と、名実共に連盟の中心的存在である、わが明治学院大学の負っている使命は重い。



未来へ駆けるマーク

新時代に挑戦するカーディーラー

東都いすゞ

本社〒108/東京都港区芝4-2-3 ☎453-6311

社員募集…御希望の方は案内書をさしあげます。

自動車との出会い

六二年度生

加藤

丈人

私の自動車との出会いは、周囲に自動車を扱う事が多かったので、小さな頃から大変に興味を持って観察できる環境にありまた自動車部に入り自動車と接触する機会を持ったことは今になってみれば、本当に良かったと思っている。その頃は恐らくだれでもが一度は味わった事があると思うが、自動車と競走してみたり、排気の臭いをかいで鼻をびくびくさせたり深呼吸をして、ガソリンが燃焼したあの快い臭の想い出をもって居ることと思う。その想い出もほんのついこの間の様な気がしているのであるが、今日この頃の自動車は幼ない頃のイメージからは程遠いものとなりつつある様な気がしてきた。

さて数年前から7号環状と甲州街道の交差点の大原での排気ガスに依る地域住民の健康を損ねている度合は想像をはるかに越えている色々なデータを見て啞然としたものだった。はたまた、小石川柳町の鉛公害問題、杉並の中高校生のオキシダントによる大量の被害が続出する様になってきた。

この儘、都会で健康を維持して生活していく事が可能なのだろうか。可能だと云う何の保証もないのが現実である。しかしこの儘ではいけない。現在よりも環境の浄化を一層前向きに推進する為に、大いなる規制がなされんとしている現状であるが、車を共にの生活をしておられる人は自分から進んで公害の要因にならぬ様な排気ガ

スを排出する様に点検なり調整をしていかないと、日本国土の中で都会に生活を求めている人は、大変な環境の中で公害に蝕ばまれなければならないという事になる。

その点から私は環境浄化推進の一員になりたいものと大いに励んで居る次第です。

車の使用者と整備者が一致してきびしく排出ガスを規制し、昔味わった”いい臭いだなあ”と云う位に環境を浄化し、子子孫孫に至る迄、都会にて安心して健康な生活のできる様に真剣に取り組んでいかなければならないものと大いに責任を感じて居る次第である。

特に大きな排気量の車を利用しておられる方は一日も早く規制された条件に適合させるべく整備工場をたずねられることをおすゝめいたします。

以上

情熱、理想、信念を持て！

六六年度生

福本 喜保

この三つは、人生を生きぬくうえで、なくてはならないエンジンであり、燃料であり、潤滑油であると思う。人生には変わる目標と変わらぬ目標がある。これをやりたい、これを達成したい、というような目標は変わる目標である。だから一步一步前進し、能力が増し、仕事が大きくなる。しかし、自分はこの生き方を貫きたい、こういう生き方をしたい、というような目標は変わらない目標である。そういう変わらぬ目標をもった人物になりたいものである。年に応じ、時に応じて変わっても、それをささえる情熱と信念は一貫して変

わらないのが、私の理想とするところである。しかし、この三つは表裏一体となって、はじめて大きな力となる。理想の実現をめざしているからこそ、情熱が湧く。困難の壁に行く手をふさがれても信念がそれを乗り越えさせる。自分が燃焼し、燃えつつけていると、周囲の人達も、その炎の中に巻きこまれる。自分が燃えなければ、けっして人の心に火をつけることはできない。信念と情熱は、困難を乗り越え、道を切り開くための最大の武器だ。乗り越えられない困難だ、と思ったときが敗北である。老人のような人といわれるのは情熱を失ったときだ。情熱があると、積極的な行動をとる。ものおじしない。引っ込み思案などはふっとんでしまう。機敏な若々しい行動が生まれる。困難を乗り越えるためには、あらゆる可能性を探り、ほんの少しでも希望の灯が見えれば、それに向って突撃しなければならぬ。それは冒険であり、未知への挑戦である。情熱と信念は若々しい人生のシンボルである。

記録映画を顧みて

六八年度生 谷崎 洋一郎

昭和四十四年の十二月頃、私が二年生のときに、ふいに自動車部の活動をいつまでも残しておきたい気持ちになって、私は映画を作る決心をした。それまでも写真などは随分残っていたが、動く映画となると遠征の記録がわずかしかなかった。記録映画としては初めての試みということになる。そこで、ふだんから写真や八ミリ映画を撮っておられる六十五年度の田丸先輩、六十六年度の松本先

輩、それに同輩の伊藤君らに協力を求めて、企画を練り、制作を始めた。最初にカメラを回したのが六十六年度生の送別会で、興奮に手がふるえるのを抑えながら、どうにかフィルムに収めたが、本来なら大酒吞まされて、へべれけになっている筈が、そういう仕事をしていたお蔭で酔えなかったのは残念である。撮影したフィルムは編集しなければならぬことと、クラブ活動自体が忙しくなるということで、藤沢の自宅から中目黒のアパートに下宿したのは春合宿の前であった。そして、その春合宿から全関東フィギア、全関東ラリーへとカメラは回ってゆく。

全関東ラリーのときは、一年生から四年生までが一丸となって練習をし、又整備で油にまみれて試合に備えたものである。その時の苦勞が優勝という名誉になって報われたし、そのときの感激が八ミリフィルムに残ったことは非常に幸運であった。そして、その後のサーキットラリーでは、カメラ三台を駆使して夢よりも一度と願ったのだが、不本意な成績に終わり、ピットインのシーンを撮影したフィルムを紛失したことに共に悔やまれてならない。夏の整備大会には私もシャーシーペーパーの選手として出場したが、映画の方に一生懸命で成績は芳しくなかった。それに比べて伊藤君は映画もやりながらエンジンペーパーで好成績を収めたのには頭が下がる。夏合宿が終って、あとは白金ラリーを残すのみとなり、最後を無事に終わらせようという願いも空しく、あのアクシデントが起こったのだが、今思うと、その当日カメラが途中で故障してラリーの様子を撮影できなかったことが、それを暗示していたのかも知れない。

とにかく、八ミリフィルム五十本を使い果たし、編集に半年を要して、ようやく三十分の記録映画の完成を見たのが四十六年

五月であり、それを初公開したのが七十一年度生の歓迎会的时候了は感慨無量で、再びこのような物好きは現れないだろうと思ったものである。しかし、何年か先に私と同じような心意気を持った人間が現れれば、私は協力を惜しまない。その日を今から楽しみにしている。

おわり

Y 字 路

六八年度生

紺 野 英 雄

自動車部という体質が、十数年の間大きな変化を見せずにきたということは、一つに外面的な制約を受けてきたこと、また、内在する保守性によるものであると思う。しかし、近い将来（現在も含んで）の活動のあり方は、大きな壁にぶつかることは目に見えている。中古車の排気規制が進めば、自動車部の車ではまともに走れなくなってしまうだろう、そうすれば、当然車に対する経費も増大してくる。ただでさえ税金や燃料費は上昇しているのだから。

自動車部の持っている車に対する概念は、現在の車に対する考え方とは、かけはなれた所で出発している。そのギャップは、新しい部員を引き入れるにしたがい、彼らを納得させるのが困難になる程である。今では、車とは単なる「足」にすぎないと考えるのが当然になってきている。

ところが、自動車部の行なっている競技方法や車の使い方は、一時代前のものである。自動車部の車というのは、他のスポーツで言えば何になるのか。テニスで言えばラケットなのか、野球のバットやグローブなのか、それとも全く別の物なのだろうか。自動車部の

車が、一体どんな位置を占めているのか、それが明らかにされなければ、現在の自動車部の部活動が無意味に制限させてしまい、新しい時代に対処できなくなると思う。

ラリーをしている時の車に対する感情は、他のスポーツと同様に、その車は自分の身体の一部としてテニスのラケットと同じような一体感を持つと思うし、また、いたわりも感じると思う。そのことは、競技の目的を最少にしぼって、その為の車を持つということである。現在の自動車部の競技種目は、多くなり過ぎた為に、必要な程車を所有しなければならぬ。競技目的をしぼることによって、自動車部の性格をより一層明確にさせることができ、より活動しやすくなるだろう。それに、自動車部の存在を一般にもアピールしやすいと思う。

その為になにかするかと言えば、異論もあるかもしれないが、ジムカーナが一番よいと思う。車の改造規定を厳しくして、安全性に注意をはらって行なえば、それ程危険性もないだろうし、クラブの持つ車輛も四、五台で間に合うと思う。車検代や税金、車輛保険がないだけで、かなり経費の負担も少なくなる。それに、排気規制も受けにくいですむだろう。

自動車部の伝統は、その時代ごとの上で築いていけば、将来の為になると思うし、社会状況の変化に対応していかなければ、結局は後輩のためにもならない。一つの殻の中にとじこもってはいは、新しい方向を見い出せないまま消えていってしまうかもしれない。

今、自動車部はY字路にさしかかった、と思う。ミスコースは許されない。

以上

雑感

六八年度生 松島 初代

私は生来、欲張りですので、文を書こうとすると、あれもこれもという具合に何でも書きたくなってしまい、結局、支離滅裂になっ
てしまうことが多いのです。今回も同様で、「いざ書かん」と筆を
とったのですが、一体何から書き始めたらいいのかさっぱりわから
ず、かといって書かないのはもったいない、と弱ってしまっている
のです。書きたいことは山ほどあるのです。学生時代の思い出や、
OGとして云いたい事がたくさんあるのですがここでは、このごろ
思うことを卒直に書きたいと思います。

人にはそれぞれ、自己の表現法があると思います。話すことで表
わす人、黙々と行動で表わす人、書くことで表わす人、絵で表わす
人、等々。私にとって自動車部は、自己表現の場でありました。自
動車部でやること全て私の考えの現われであり、それが正しいこと
でも正しくないことでも、私自身が浮き彫りにされていたと思いま
す。

所詮、人間にはそれぞれ運命というものがあって、四年間私が自
動車部員として過ごせたのも、運命に逆らわなかったからだと思い
ます。多分に無気力な言い方ですが、すべて過去のものとしての部
活動を思うと、その様な言い方になるようです。もちろん、部活動
によって得たものは、今でも自身のうちに息づいていることは確か
ですが。

人には皆ちがった生き方があって、自動車部に集まる人達でも、
ある人は華々しく活躍し、ある人は途中で退部し、またある人は、
部活動を土台として他の事で飛躍したりするのです。そういう色々
な人達が自動車部という共通体験をもつということに意義があると思
います。同じ様な人達が同じ所に集まって同じ事を考えても、そ
れはヒマつぶしの外の何ものでもないと思います。大切なことは、
お互いが無意識のうちに個性をのびし、生かしていくということだ
と思います。そこには馴れあいや、安直な妥協というものは不必要
でありぶつかりあいによる自然発生的な進歩が存在すればいいので
す。ぶつかりあいというのは単純なものではありません。感情的な
ものではない、極端に言えば、お互いに尊敬しあっている人々のぶ
つかりあいであると思います。説得とか抗議とかいう様に一方通
行ではない、上も下もない純粋なもの、そして、それこそ共通体験
の中でしか得られない、そこから一歩下がってでは得ることので
きない素晴らしいものだと思います。

そういう意味で、私はOGとなった今、一歩下がって少々迫力の
欠ける位置にいるわけです。そして一歩下がっているところから、
その中へ、もう一度入っていきたい衝動にかられながら、それが大
学の四年間でのみ実現されるから素晴らしいのだ、と痛切に感じて
いるのです。

さて、ぬけがらの素晴らしさがあって、社会に出た私は、再び一
年生の幼虫として新しい輪の中にいるわけです。ここには、自動車
部に於ける四年間を体験してのみ見ることでできるまたとない標本
がたくさんあります。そして、それらの中で自分を生かしていくこ
とのむずかしさと楽しさをつくづく感じる**ことが出来るのも、私に**

は部生活の結果ではないかと思えるのです。そして、人にはやはり、人それぞれの道があるのだなあと思うのです

一年の夏合宿の思い出

六八年度生 明 石 敏 夫

まずはじめに驚いたことは山中湖までトラックの荷台に乗せられて行ったことである。幌つきのため外は見えず、どこをどうやって通って行ったのか全然わからない。そのうえ乗ごちが非常に悪く吐き気を催し、山中湖に着いた時はふらふらであった。これから十日間も合宿があるのかと思うとうんざりした。おまけに一年の中に二人ばかり大いびきをかく者がおり每晚悩まされた。一人は二年になる時退部したが、もう一人は運悪く四年までともに過し四年間苦しめられるはめになった。そんな中で唯一の楽しみは無免許練習であった。私は大学に入るまで車には全く興味がなく、変な話であるが自動車部にもただなんとなく入部したのであった。そんな私が自動車部に入ってはじめて車を運転させてもらい運転に興味を覚えたのである。だから、ラリー、フィギア、整備など全く興味がなかったのはしごく当然であったと思う。ただ夏合宿中無免許練習だけが楽しみで過した。四年生も実に熱心に教えてくださったことを覚えている。今考えてみるとこの合宿の無免許練習が四年間自動車部に私を在籍させた基礎になったのではないかと思う。

東京都港区三田五丁目13番13号

西澤運輸有限会社

代表者 西澤利祐

電話 (451) 2591
(452) 7985

カップ・バッチ・金・銀盃
尾野トロフィ徽章製作所

尾 野 松 史 郎

東京都大田区上池台 2 丁目 37 番 13 号
電話 東京 (03) 729-4521 番

パン・洋菓子

東 城 屋

東京都港区白金台 4-5-4
TEL (441) 2649



カロ-ラ
セリカ

いつも愛され信頼されるディーラー

東京トヨタ ディーゼル株式会社

本 社 = 目黒区青葉台 2-19-11
TEL 719-1211 大代表

営業品目

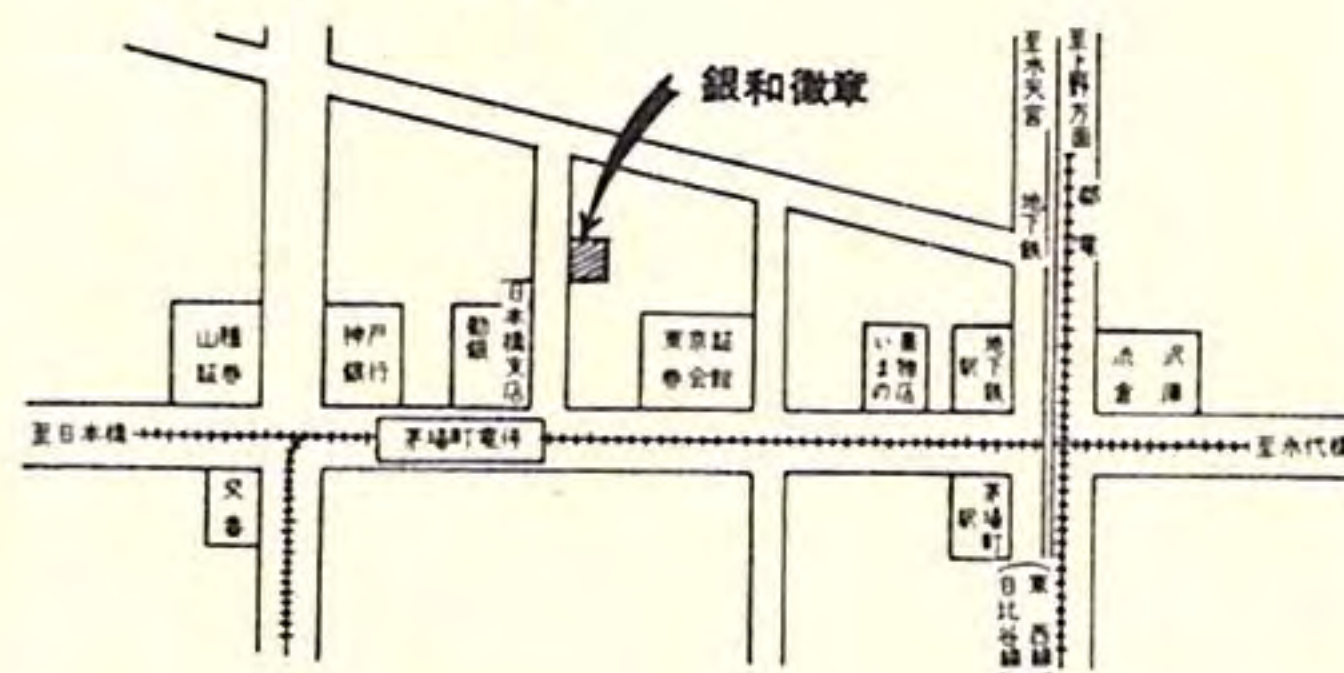
バッジ・メダル・カップ・トロフィ

楯・ネクタイ止・ペナント・旗

銀和徽章株式会社

営業所 東京都中央区日本橋茅場町1の14
TEL (667) 5094~6
熱海店 熱海市福道町3の1
TEL 0557(82)2566
本社工場 東京都練馬区小竹町2の21
TEL (955) 7853

明学生の方は特別サービス致します。
お気軽にどうぞ。



65年度生の田丸です

少しでも明るく豊かな御家庭を築くことが
出来ればと、この広告を出します。

貯金、保険の御用は
中目黒駅前 郵便局

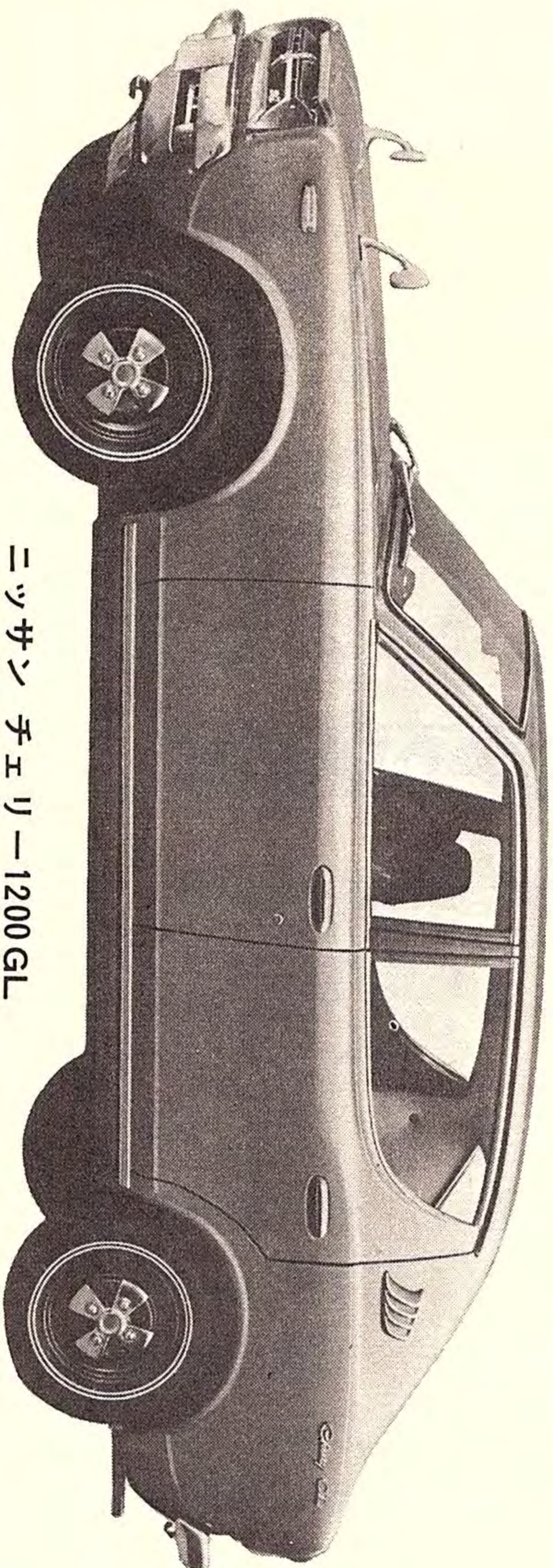
719-9895

田丸 英一



自慢のFF走行

NISSAN チェリー 1000 1200



ニッサン チェリー-1200 GL

社員募集

当社人事課へTEL

日産チェリー-東京販売株式会社

〒106 東京都港区六本木 3 の16 の26 番 (585) 5311

キャデラック
ビュイック
フォルクスワーゲン
ボクスホール
ボルボ
アウディ
メルセデスベンツ
ニッサンスカイライン

一流品をいつも
あなたに!!

YANASE

ヤナセは中古車のイメージを大きく変えました。

展示場で“くるま”と対話をしてみませんか。

展示場

芝浦ショールーム

港区芝浦 1-36

TEL 452-4311 (大代表)

米車中古車センター

目黒区碑文谷 2-21-15

TEL 714-7303・712-7637

世田谷中古車センター

世田谷区桜ヶ丘 4-26-6

TEL 426-2611-8

ヤナセ

無 題

六九年度生 加藤 堅 司

昭和四十七年度、我、明学自動車部は幸運にも、男女共全関東総合優勝することができた。振り返ってみると、今年の実力は客観的にみてもそうすぐれているものでなく、当部の二十年近くなろうとしている伝統と、OB諸氏の暖い激励があったからこそ優勝できたと確信している。

総合優勝した結果、体育会最優勝クラブとしても選出され、来年度は追われる立場になり、学外、学内供におおいに注目されると思うが、現幹部を中心にぜひとも全関東二連勝、そして全日優勝をめざして頑張っただけだと思ふ。

さてこれからの大学自動車部を考えるにあたって種々、大きな問題をかかえていると思う。それは三、四年前から言われ続けてきたものであるが、社会問題としての交通事故、排気ガス規制、又実際の活動面においては、フィギアの練習場不足、部員減少、ラリーの開催等の問題があげられると思う。すでにラリーは来年度学連の公式競技としてとりやめになっている。もちろんこのような問題に手をこまねいた訳ではなく、学連を中心に種々の問題に取りくんできた。(四十七年度明学は学連の当番校)それは交通遺児育英募金、又競技としては関東九大学ジムカーナ対抗戦があげられる。募金はかなり社会に自動車部の存在を認識させる事ができたと思う。又ジムカーナは二年程前から早稲田、慶応を中心に行なわれてきたもの

であるが、ラリーが学連の競技としてなくなると、ジムカーナが何年か先、学連競技として採用されるかも知れない。

しかしこれから先自分が考えるよりも、もっと大きな問題がでてくると思うが、実際に活動してゆく現役諸君は、明学自動車部の伝統を守りつつ、勇気を持って種々の問題に立ち向って益々発展させて欲しいと思う。

フィギア雑感

六九年度生 原 悦子

運転技術競技のことをフィギアという。誰が言い出したのかは知らないが、うまいことを言うと思う。

「自動車部ってどんなことをするの？」

ある友人に聞かれた。

「ラリーと整備とフィギアよ。」私は答える。

「フィギア？ フィギアってスケートでしょ？」

私は何度このような会話を交わしたことであろう。かく言う私も今より数えて四年前、勧誘されし頃、これと全く同じ会話をしたのである。ただし質問者としてである。

それにつけてもあの美しいフィギア・スケートと、ハンドルにしがみついて、今にもかみつかんばかりの顔(あくまでも想像である)をしてする自動車部のフィギアとは、同じフィギアでありながら、何と違うことかと昔はよく思ったものである。しかし私は、同じフィギアという以上、本質的にはスケートも、運転技術競技も全く同

じものではないかと思うのである。要するにフィギアとは決められた時間内に、決められたコースをより美しく回ることなのだと思う。確かにより速く、脱接も少なくということは大切だ。だが美しく車を動かすというのを忘れては意味のないことだと思う。走っていると言うよりはむしろ、流れているように車を動かす。その為には当然、衝動などがあってはならないし、かつリズムカルに車を動かさなければならぬ。ブレーキにも、ギヤチェンにもより繊細な心使いが必要になってくるわけである。最近の傾向としてコースは簡単になりつつある。そうなればなるほど、私はより美しいフィギアをする必要があるのではないかと思う。つまり氷上ではなく、試験場のコースの上を、スケート靴ではなく、自動車で美しい演技を見せることなのではないだろうか。

私のみた自動車部

六九年度生 小林 由紀江

“クラブ”……だんだん変わりつつあるクラブ、自動車部も変わった。四年前、私たちが入った頃はもっとピリピリと感じる何かがあった。今よりずっと封建的だったのかもしれない。誰かが遅刻したり、失敗したりすると必ず連帯責任として正座や腕立てをやらされた。でも私はクラブとはそういうものだと思いこんでいた。だからいやなことがあっても、“やけ食い”をして我慢していたというわけである。それに、遅刻をしそうになったときなど、恐ろしい先輩の顔が目の前をちらついて離れず、恐る恐る練習場へ行ったもの

である。とにかく四年生は神様のようだった。しかし、封建的な上下関係があつて嫌だとも思ったが、このクラブを通して先輩に対する言葉使いや態度をいろいろと注意されたことによって礼儀正しさというものが身についたように思う。最近はこのクラブも柔らかなムードになってきているようであるが、団体活動を続けていくうえではある程度の“厳しさ”が必要であると思う。

また、クラブにおいて人間関係を考えるとき、他の社会にはないような、つまり利害関係を考えない純粋な深い結びつきがあるということがある。山中湖や七里ヶ浜で合宿したのが四年間で約百三十日、これだけ一諸にいれば良い面も悪い面もだいたいわかってくるし、言いたいことは言えるし、本当にみんな兄弟のような感じである。私はこの四年間に造り上げられた人間関係というものが崩れることなくいつまでもいつまでも続くことを願うのである。

荷造・発送・保管・運送一般

田中運送株式会社

東京都港区新橋四丁目二〇番六号
電話(四三四)二七二二番(代表)

「会計として」

村 里 忠 充

何の取柄もない自分ではあるが、少々、珠算ができる為に大変な一年間を送る羽目となってしまった。もちろん会計という役職に就いた為である。

先輩から引き継いで、自分が会計として一本立ちして一カ月もすぎると、部の台所は火の車となってしまった。やりくり算段、ない知恵を絞っているいろいろと考え、やってみたものの、これといった秘策が考え出せるわけでもなく途方に暮れてしまった。そこで、最後の手段として、会計が自ら先頭に、部員一同一丸となって、きょうは浜名湖、明日は軽井沢へと出稼ぎ、すなわちアルバイトに行く事となった。しかし、この様に部員一同が一生懸命頑張ってくれても、クラブの財政状態はいっこうに良くなり、頭の痛い毎日が続いた。六月になってやっと大望の予算がおりたが、これも束の間で、お金は羽がはえた様にどこかへ飛んで行ってしまった。そこで思つく暇もなく、又、出稼ぎの毎日をおくることとなってしまったのである。

この様に我クラブはそうとう重症の慢性の金欠病の状態なので、試合のシーズンとなると大変であった。如何せん、部の車は老朽化しており、整備には万全を期さねばならない。かといって必要なだけ充分に部品を買えるわけではなく、まして新しい車を買う余裕はまったくない。そこで、どこまで整備を行なうかで、車の整備担当

者である車輛と、それこそ喧嘩となりかねないまでに議論しあう。特にラリー、及びサーキットラリーの様な種目においては、車の安全性が一層要求され、整備を慎重に行う為、その妥協点がむずかしく、激論、また 激論をたたかわす事となった。加えて試合シーズンが会計の帳簿提出とぶっかかり合い、猫の手も借りたい忙しさで、頭に血が上っているのではどうしても語気が激しくなってしまう、ただでさえ役職の上で犬猿の仲である車輛との間に益々険悪な雰囲気 が漂った。決して個人的、人間的にはなく、共にクラブを思う気持から出たものではあったが……。

しかし結局最終的には安全性が第一と言う事で、車輛の意見を大幅に取り入れざるを得ず、これらの問題の解決には、どうしても大幅に譲歩せざるを得なかった。

この様にいろいろな問題が次から次へと起ってきたが、自分なりにどうにかこうにか解決し、無事に任期を終了する事が起きた事に對し、部員諸君、特に少い予算で最高の整備を行い、全関東男女総合優勝の土台を築いてくれた車輛の諸君には大変感謝している。

無 題

高 橋 功

自動車部は名の示す通り、自動車ぬきでは語れぬクラブである。しかし、自動車は現在、事故、排気ガス、騒音などにより、批判のやり玉にあげられている。自動車は文明の利器としての脚光を浴びていたと同時に、その逆の文明破戒の一躍をになうものとして考えら

れるようになってきた。もはや、自動車は人間を否定し、追いちらす、対立したものにその立場をかえていようだ。今の自動車部は自動車のもつ便利さを追求するか、それとも極端ではあるが廃止するかを選択をとるかせまられているようである。

ではなぜこの様な意見が出てきているのか。まず交通事故における戦後の死傷者は八〇〇万という数字である。これは第二次世界大戦のそれよりも上回る数であり、自動車の普及につれ増大した。また、牛込柳町の交差点で代表される排気ガスによる大気汚染の元きょうであり、光科学スモッグの元であるという立場から発せられていると思う。これらの意見は、誠心的をついている。しかし、ただちに自動車を捨てさることはできるであろうか。もし日本の全土から自動車を追放したら、日本の経済は大混乱に陥り、国民は交通機関を失うことになる。今や自動車は、完全に人間に密着しているのである。自動車は機械であり、人間が創り出した機械を人間が操作しているのである。機械の操作次第で良くなるし悪くなる。事故は、人間の操作による欠陥により発生し、あるいは、自動車の持つ性格を知らないで起きるものだ。それ故、人間を教育しさえすれば少しは減少する。我々、自動車部員は、その模範となるべきであると思う。

排気ガスに関しては、我々の部車は、本年四月から施行される規制に該当すると思う。だが、大気汚染の元きょうが車と報道されているが、車による汚染は全体の三割以下であり、工場からの排煙の方がもっと大である。車の規制よりも工場の規制の方がもっと早急に行なわれなければならないのである。だが、工場の煙は以前として昔のままである。しかし、車も三割を占めているのであるから、

今後の規制も当然である。しかし、自動車部では、それに見合う対策として、金の問題につきあたる。それ故に自動車部の将来の存続が問題される。

我々、自動車部員は事故の撲滅に積極的に取り組むと同時に、社会への貢献をしなければならない。例えば、交通事故による遺族の子供達への支援、則ち交通遺児への積極的な援助などは、我々学生のできる唯一のものである。現在の自動車部の活動は単に競技のみを行うものではなく、社会との連帯により交通事故撲滅への一翼をになうものとなければならないし、交通遺児への援助もこれからの自動車部の方向を見出す、一つの指針でもあると思う。

デザインパーマ 最高のカット技術

現代のフィーリングにマッチした店

ヤング理容店

千代田区神田神保町3-2
TEL (261) 5739

耐久走行レース出場記

六九年度生 井上 幸二

全関フィギアが終ってホッと一安心と思ったのもつかのま、次には、FISCOで行なわれる耐久走行レースがまっていた。全関フィギアの前から計画をたてて準備をしていればよかったのだが、フィギアのことしか頭になかったので、ぜんぜん考えていなかったのである。

そこで、どの車を使ってレースに出場するかが問題となった。我が部車は、どれをとってもおよそサーキットを走ることなど縁のある車などなかったが、SUツインキャブ、ディスクブレーキ、四速フロアシフト付の高速向きのブルーバード一三〇〇SS以外は考えられなかった。この車は購入当初はエンジンシャーシ共抜群の性能を持ち、一度全関ラリーで優勝したこともあったが、寄る年にはかてず、各部がたがたであった。特にエンジンは、息つきがはげしくとても走れる状態ではなかったが、全関ラリーの夢ももう一度とばかり、もう一度公式戦にデビューすることになったのである。

そこで、エンジンオーバーホールとクロスナンバー及びサスペンション交換を並行させて、作業を進めることにした。エンジンは私を中心となり、シャーシは山本と松川が中心となって行なうことにきめた。しかし簡単に引きうけてしまったものの、エンジンオーバーホールなど一度もしたことがないのであるか、これも経験と思っ

まず、ボンネットをはずし、ラジエターや各部の取付ボルト、プロペラシャフトをはずし、フューエルパイプ等を切りはなして抜き出す準備をした。初めてはずすので、なかなか引き抜けずに、2時間ぐらいかかって、やっと抜けた。これをスチームクリーナーで洗ったが、しっこくこびりついた泥とオイルは容易にはとれず、軽油でブラシを使って洗いあらかたの泥はとれた。

エンジンとボディが分かれたので、シャーシは、山本たちに引きわたし、エンジンオーバーホールに専念することになった。サービスマニュアルを見ながら番号順にとりはずしていったが、ボルトナット類を、あまり区別せずにはずしてしまったので、組み立てたとき、多少のネジがのこってしまった。クランクプリーをはずす時は、SSTがないのでモンキーレンチの大型のものを、ハンマーでたたいてボルトをまわしてはずした。フライホイールもまわってしまうので、さまざまな方法をくりかえしていたので、半日ほどかかってしまった。なんとか全部ばらしたが、内部は、まっ黒でこれにさわったら手を洗ってもあまりとれなくなってしまった。

オーバーホール用のガasketキットなどの部品を用意したがSUキャブ用のインシュレーターは、どこへ行ってもなくとりよせてもらったりして手間どってしまった。シリンダーヘッドのバルブすり合せは、圧縮もれがはげしく、我々では手におえなかったので、専門の工場へ先輩の紹介で出すことにした。バルブは番号をつけて区分しておいたのに、むぞうさに一しょにされたのには、がっかりするやらびっくりするやらである。このぐらいガタが出るとどれでも同じことらしい。

これが出来上がるまで、一週間ほどかかるということなので、そ

れまでにブロック部分を組み立てることにしたが、クランクシャフト両端のパッキンが大きすぎたので、むりやりおし込んで組み付けたが、後で、ミッションハウジングの穴よりオイルがにじみ出てこまってしまった。ピストンリングだけ新品を付け、ベアリングキャブをはずした通りに付けたが、クランクシャフトがまわらず、何通りにも組み付けて一日かかってやっと、まわるようになったりした。最初リングが新しいので、動かないのかと思って修理工場にきいてみたら、そんなはずはないといわれた。デスビを駆動するギヤも、さしこむと思った角度に入ってくれず、オイルパンを付けてから、修正しようとして、中におとししまいオイルパンをはずさなくてはならなくなり、シールパッキンがはがれなくなりむりにはがしてオイルパンのパッキンがちぎれそうになってしまった。これもオイルもれの原因になったようである。

ヘッドも工場から出てきたので組み付けてもれをテストしたら、ぜんぜんもれていないので、ぜったいになると確信を持ってきた。一応組み上がり、ベンチにのせて単体のままエンジンをかけようと試みたが、ぜんぜん火花がとばなかった。実際に動いているエンジンで点検ランプを使用してみて、点検方法を研究して、デスビを数回バラしては組みたてて、なんとなくなおってしまったようである。バルブクリアランスを○・三五mmに調整しポイントも新品を使い、プラグはボッシュを使って、エンジンをかけてみたら、マフラーがついていないので、エキゾーストマニホールドから火をふきながらエンジンは快調にまわった。思わず心の中でバンザイとさげこんでしまった。

エンジンと、車高のおちたボディとを組み合わせ、一応走れるよ

うになったのは試合の一週間ほど前であった。みんなでうれしくてかわるがわる清正公をぐるぐるまわった。すべて快調である。

ブレーキも心配だ。たので、パッドは一応新品を使うことにしたが、右前輪のピストンのもどりが悪く部品を買いにいったが、生産中止で在庫もないといわれ、解体屋が終っているのにたのんで売ってもらった。いろいろなトラブルがあってなんとか形になったのは前日の八時ごろであった。それから山中湖の湖北寮に自走して向ったが、コーナリングも加速もなかなかよかったようである。色もぬりかえたかったが、赤いペイントしかなかったので、ストライプを入れたら、とてもどぎつい色になってしまった。みんなから非難をうけた。四時間ほどで山中湖についたが、ずい分東京よりひえるようだ。夜中の一時ごろついて、寒さと疲労でぐったりとなって眠った。

いよいよ、試合当日となった。空は青くはれわたり富士山が美しい。なにかよい成績がとれるような気持ちになってきた。

FISCOについて、車を点検すると多少のオイルもれとフロントサスペンションにがたがあるので、車検にまにあうように急いでおした。車検まぎわにやっとなおった。

女子のレースがさきにあつたので無事走れるかどうか不安であったが周回をかさねていくうちにそんな不安はふっとんでしまった。十分、他の大学の車といっしょに走りまわっているのだ。

いよいよ男子の番になり、ピット作業などもあせて手まどり、失敗の連続のうちにレースは終わった。

経過は十二位に終わってしまったが、部員が一致団結して目標に向かえたことのほうが私としてはうれしかった。上位入賞ができな

ったことは残念であるが、クラブ活動をやってきてほんとうによかったと思う。

自動車部の四年間

六九年度生 山本 俊介

自動車部の4年間を振り返って、なんと早く終わってしまったのか、という感じがする。一年、二年のうちは、上級生から命令されて、トレーニング、整備など部活動をやっていたけれど、三年になり下級生もできて、谷崎さんの後を受け継ぎ、車輛という仕事を、一年間やってきた事が自動車部の中の最大の思い出になったことだと思う。

我が自動車部の部車は、名義が学校法人明治学院の為に、車検を取る時も、廃車にする時も、書類には、理事長印を捺印しなければならず、その為に、学生部と管財課に、「願い書」を提出して書類を作成し、印鑑証明書の手配をしてもらわなければならない、また、「報告書」も提出して、自動車部の現状も、より知ってもらうことも仕事であった。

車検を取る為には、車庫証明書が必要で高輪警察署に、書類を持って行く時には、明治学院の土地抄本を、学生部、管財課とおしから芝の法務局に取りに行かなくてはならなかったが、時間がなくて直接申請して管財課の森川さんから注意をうけたり、車庫証明書(一カ月有効)を早くとりすぎて、車検整備に時間がかかりすぎて、無効になってしまって、再度、書類を持っていった注意をうけ

たこともあった。

減免申請では、毎年、書類の形式が違って二度も三度も捺印してもらいに行き、管財課の森川さんには、大変迷惑をかけて、すまなかったと思う。

今振り返って見て、失敗ばかりが目について、谷崎さんや後輩にも迷惑をかけてしまったと思う。

卒業とクラブと私

六九年度生 及川 せい子

卒業……そこには、一つの終りと、一つの出発がある。さようならには心が残り、心にちはには、期待と不安が広がる。私において卒業とは……中身の成就を意味しない。何も完成しはしなかった。いやでできなかった。ただ過去四年間の空間の中に詰め込まれた身体と心の呼吸だけだ。その呼吸は、多くのものを消化へあるいは消耗の方が私には近いかなし、良くも悪しくも多くのものを生んだに違いはない。しかし、そのもろもろの行動と、その結果に悔いはない。私には、もう一つの道、もう一つの生き方なんて考えられなかったのだから。

そして今、だれもがするように、自分の存在した空間に、自分自身の位置づけを試みるとしたら、私にとってクラブとは……大学生活における多くの場を提供してくれたものだ。私のクラブ生活一年目は、興味(好奇心?)と生まれつきの順応性(と思うのだが……)から一生懸命の日々が過ぎていった。北クラブと教室の汗だくの往

復はそれを如実に示しているノダ。二年目、人並に自分の状態に疑問を感じる：果して、このままでいいのだろうか：まだまだクラブは未知のものではないか。：悩むという事は、真剣に物事にぶつかっている証拠なのだ。ともかく、まともな二年間が過ぎ、ただ、ただ最悪の二年間：知られざる自己 ディスカバー myself がやってくる。本来なら勤勉で努力家のはずだったのだが……。要するにクラブから見たら：の人間という事か。あのクラブに半分背を向けた自分の存在、そしてあの失態の数々……。ここではその陳列は止めておこう。私と同じ空気を吸っていた人なら、思いあたる人があるだろうけれど、あまりよく知らない人なら、ひょっとして良い印象でとめておいてくれるかもしれないから……。甘いかなあ……。

それでも私をクラブに存在させたものは？

先日、追コン明けの二月五日・六日に、四年間見なれた顔ぶれ、総勢十四名で、ビーチク、パーク伊豆への一泊旅行をしてきた。ほろ酔い？加減の私の目に写る、クラブ生活の道づれだったどの顔にも、一つ一つの思い出がのぞく。あの大嫌いなロックの後の、不思議なほど快い汗を共にした仲間。不満をぶっつけ合った仲間。そして時には恋愛論なども……。お互いの良い悪いを一番良く知っている。知られている仲間であり、気の許せる仲間なのだ。私が幾度となく、クラブを離れようと思った時も、意識したのは、その存在だったに違いない。そうだ！この場でいっちゃおう。あの数々の失態を怒ったり、かばったりしてくれた仲間……。ありがとう。

そして現役の人達に……。上部だけではない。確かな手ごたえのある仲間を見つけて欲しい。同じように、他のクラブではない。この自動車部に、この人生の一時期、身をおいた者、足を踏み入れた

者として、あなた方が、その中では何かをつかむ事を祈っています。結局、卒業する私は何も卒業しなかったけれど、この四年間の空間で得たものを失いたくない……。と強く強く感じています。ガンパロウ!!

山中湖一周

七〇年度生 正田 一明

きょうあたり山中一周がありそうだなあ……。何んとかいやな予感がする。トラックの後に乗せられて午前中の練習へ。暑い。ああ早く水が飲みたい。もう声が出ない。たすけてくれーッ、といつもの午前の練習を終え、またトラックで昼食を食べに寮にもどる。

「おい、本当にきょう山中一周、あるのかなあ……。」

「そりゃあるだろう。だって前に走ったのが三日前だろ、それに合宿もあと三日だから、どうしてもきょうということになるもんな。」

「きついなあ……。ところでお前足のマメなおったのか。」

「それどころでないよ。一秒でも多く俺はねていたんだから。」

「そうかよ！じゃおやすみ。」

これもまた、いつもの昼休みの風景。すべていつもの通り日程が消化されていく。ただ何んとかなく四年生の顔にいやな笑いが見られるような気がする。やがて午後の練習がいつも通り進み、三時半になった。練習に夢中で、例のいやな予感も忘れていたが、突如として「練習終りーッ」との声。一瞬「エッ」と思い、次に「ついに来るものが来た。やっぱり予感は当たっていた。」と何とも言いがたい

気持ちにおそわれる。その時の自分の顔は……。考えて見るとニガ笑いが出てくる。

「免許証はあずかるぞ。」

「先輩、ちょっと小便してきていいですかあ。」

「早くいってこい。」

みんな靴のひもを結びなおしたり、準備運動をしている。

「スタートラインはここだぞ。」

四年生がラインを引く。最も不安な時がくる。自問自答がはじまる「きょうはどうだ、一周持ちそうか。だめだな、どうも体調がおかしい。でもあいつには負けたくないなあ――。」

「スタート!!」

例のごとく、ダッシュのごとく走り出すやづがいる。最初からあきらめの境地にいて、それこそ、トボトボ走り始める人もいる。

自分は……ダッシュするでもなく、トボトボとでもなく中間をマイペースで走り出す。何事も中康が一番とばかり。しかし、やっと湖が見えるあたりまで来たらもう末期的病状が表われはじめた。ゼイハア、ゼイハア。その苦しい息の下から、無意識のうちに「疲れちゃったら、休もうよ。」というコマースシャルソングの一部を繰り返し繰り返し念仏でもとなえるように口ばしっていた。まるっきり時間の観念がない。何分走ったのか、何時間走ったのか皆目見当がつかない。しかし自分の現在位置はやっと旭ヶ丘をすぎたばかり。前を見て誰も見えない。後を見る……その余裕はまったくくない。

ゼイハアッ、ゼイハアッ、ゼイハアッ、気がついてみたら、自分は走っていなかった。また気を取りなおして走り始める。正面にホテルマウント富士が見える。もう念仏はと覚えていない。だんだん

目が一点に集中してくる。ずうっと湖面を見ながら走っている内、むしうに湖へ飛び込みたくなる。苦しい。苦しい。今度は意識的に歩いてしまった。

後から誰かがおいかけてきた。先輩だ。「おい、ちゃんと走れ。」一言残して先へ行ってしまった。自分も負けじと又走り始める。その先輩の後について、おくれまいとしてどのくらい走ったであろう。やはり又歩いてしまった。結局その先輩にもついていけなかった。後は走っているのと、歩いているのが半々の状態で、ようやくとゴール。

疲れた、疲れた。本当に疲れた。その言葉のうしろから、先程の先輩の言葉が耳に入ってきた。

「ああ、もう終ってしまった。これで最後か。」

「ドキリッ」とした。と同時に先輩に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。あのしんみりと言った先輩の言葉。

何よりも一番心に残ったことであり、勉強させられたことであった。

祝勝会の思い出

七〇年度生

木村

真

十月十四日、部会で新幹部が発表され、自分は、主務、指導、OB係という三役を一人で務めることとなった。主務の仕事に関しては、先輩の久米さんについて、主務会議等に出席して大体のところは理解していたつもりであったが、指導はともかくとして、OB係

となると、全然わからないのである。しかし、考えたり、教えられたりしているのには、あまりに時間がなかった。全関東総合優勝の祝勝会がすぐ後にひかえていたのである。

十月末から、先輩への失礼は覚悟の上でとにかくOBのところへ援助金をお願いに行ったのである。住所がわからないのはもちろんであるが、顔を見たことのないOBが大半である。それでも、中央、新宿、杉並、葛飾、渋谷、横浜と車を走らせた。

横浜へ行った時である。あるOBから酒をすすめられ、酔っぱらって一時間位寝たことがある。親切だったOBだけに自分も甘えてしまったのであるが、大変な迷惑をかけながらのお願いであったと思ひ、横浜のOBをはじめ、多くのOBに頭の上がらないところである。

次に、うれしかったのが、今まで消息不明であったOBの住所がわかった時である。そして、「何か必要な時があったら、いつでも相談に来い」と言われた時である。

そして十二月九日、祝勝会当日、学校で電話番号をして、午後五時半八芳園に行った。下級生に駐車場の誘導をまかせて、自分は二階の会場に行き、受付の場所をつくり、幹事長の小林さん、監督の池田さんと、式のやり方、受付の手順など最終的な打ち合わせをした。

打ち合せが終るか、終らないかというときに、足木さんが見えになった。仕事の都合とはいえ遠い愛知県からわざわざいらして下さったのには本当にうれしかった。また、学長先生のいらっしゃって下さったのにも、本当にうれしく思いました。その上百名近くもOB、学内、学外招待者と多数の出席を得、盛大な会となり、O

B、現役ともに楽しいひとときをすごせたことは、大変うれしく思っています。

祝勝会の準備やなかで走り回っていた時は、よく病気になるいな、と思う程、忙しかったけれど、今から思うと、大変よい経験をしたように思います。この経験を生かしてこれからの部活動に大いに頑張りたいと思っています。

最後になりましたが、祝勝会開催にあたりお世話になったOB方々をはじめ、関係者に深く感謝しております。

無 題

七〇年度生 岡 部 由美子

自動車部は全関東総合優勝という名誉ある栄光を勝ち得ることができて、いまや明学の自動車部は油ののりきった時だと思われるだろうが決してそうではないと思う。

女子というもののクラブに対する無関心さ、受身さへ女子に限らないと思うが、多分、他大学も皆同じ感を持っているであろうが、この実状は決して、真の意味の優勝には結びつかないのである。今回、フィギア・整備・ラリー・耐久走行レース、すべていつも上位につけていられたのは、他人数的にもそろっていたし、また、皆それだけのやる気ももっていた。

しかし、これからいざ自分がやるという段階になってみると、人数は少ないし、普段の活動では女子の顔をみることは珍しいことなのである。今の私にとっては試合に勝つことのみがクラブ活動では

ない。むしろ試合などまるで関係のないことなのである。なぜかという、まだ試合にむかってうちすすんでいく段階までいかないのである。その前に、部員相互のクラブに対する考え方を再認識する必要があるのではないだろうか。皆、考えている事はバラバラで、クラブ活動を通しての団体意識もないのに、これから試合に出て優勝したとしても何の意味があるだろうか、

なぜ、自分の存在をクラブにとってただの試合のための道具ではなく、自分に与えられた最後の学生生活であるこの四年間を素晴らしい、有意義な時間として残すための努力をしないのだろうか。ただ部員名簿に名前をつらねているだけの存在ではなく、自動車部というものの中にはいりこんでほしい。そうしなければ、真の意味での全関東総合優勝は二度とできないであろう。

全日フイギア

七〇年度生 高橋 良次

11月19日、福岡県の博多にある自動車運転免許試験場で行なわれた。同志社、西南、龍谷、広島大など、関西の強敵と、関東の強敵が顔を会わせた。

私は小型貨物の代表として参加した。今回で、フイギアの出場回数は4回目で、公式戦で初出場である。

いよいよ試合の当日、闘志と不安が入りまじった変な気持で試合に臨んだ。試合の順番は16番、午後の1・2番頃であったが、あつという間に自分の番にきた。胸がどきどきして全然おちつかなく

なった。今、思い出しても、その時の気持はいやなものである。こんなに大きな試合に、自分の大学を代表して出場していると思うと一層である。しかし、いざ車に乗ってみると、それどころではない。練習どうりにできれば十分である。車に乗ってハンドルを握ったとたんに関心に居直ったのか、だいぶおちついた。試合となるとやはり、だいぶ時間がかかり、最後のボックスにきたらみんなのハラハラしたような顔つきが目に入った。もしかしたらと思い、急いだがあとの祭りである。ボックスの確認を決めて、もう出る時に審判の笛が鳴った。タイムオーバーである。あんなにたることかとなさけなくなった。全体に時間が練習の時よりかかり過ぎていたのは感じていたが、まさか試合でタイムオーバーするとは思わなかった。全く残念である。今振り返ってみて、満足ゆく練習ができたか、自分で納得できたかと自問してみても、体力不足の一言につきると思う。しかし、試合が終ってホッとした。

男子個人戦ではコースと試合車が、前もって公表されず、試合の始まる前に選手に知らされるといふラブラインド制がとられた。この方法はおもしろいが、まだいろいろと問題が残されている。

九州の方では、関東と比べて車は旧式が多くコースは角落ち、縄でコースを作ったりしておもしろかった。

自動車部においてフイギアは唯一の体育的なスポーツであり、これこそが自動車部そのものである。このフイギアは長い間大きな変化もなく受け継がれてきた。その特異性は自動車部の特異性でもある。

現在、大学自動車部は多くの問題をかかえているが、その発展的な面を考えるとフイギアは、今のままではあまり望めないと思う。

だから、これからフィギアについて、自動車部についてもっと検討し、発展的な面を考え変えて行く時期にあると思う。

整備大会

七一年度生 中原 晴次

「整備大会に出る気あるか」と井上先輩にいわれて一瞬「エッ」と我耳を疑った。元来自分はメカニックが好きな性質で、母親に聞いた所では赤ちゃんのころから、おもちゃの自動車をかなづちを持ってきてはたたきつぶしていたそうなのだ。それから小学校に入って模型を作り始め中学校に入ってからカメラにこり高校においてはそれらに輪をかけたように重傷になり、おまけに郷の岩国基地のすぐ側に行き頭上を飛んで行くファントムの激しい爆音にこまくがはりさけそうになりながら、ながめては快感を覚えていたのである。そんなもんで大学にもぐり込んでサークルに加わりとう意を決した時もやはり機能美をみい出せるような所に行こうと思った。してみるとなかなか好みがないものである。やっとそれらしきものを見つけて、なにはともあれと腰を落ちつけたのが、なんとかの誇り高き明学自動車部なのである。一年のときはなんでフィギアなんぞやるんだらうと矛盾を感じながらも好きな、整備の為に文句も言わず動きまわったのである。そして二年になって六月井上先輩に「整備大会」に出る気あるか。」と言われてドキッとしたのである。最初は冗談かと思ったが何度となく言われてやっと本気にしたのである。それからというのもやっとクラブに対してやる気を出して先輩に諸々の事

を教えられて自動車ってよくできてるものだと思心したものである。整備合宿、合宿整備、夏期合宿もおわり、岡部先輩のカリーナと部車のサニーで東名高速を一路名古屋へ。いよいよ予選が始まる時、興奮で心臓がガッタン、ガッタン鳴っていたのであるが、一言「落ち着けよ。」と先輩に言われて少々静まった。それでも興奮していたと見えてシャーシ部門の学校名を書くらんに「中原晴次」と書いて先輩に注意され「コリヤイカンナ」と自重してそれからやっと落ちついて行動を取れるようになったのである。先輩が8/9割自分が残りの大部分を点検して無事終わり結果も八位と上々。宿に帰って先輩方が得点の計算をして「ヤッター総合優勝という言葉を聞いた時は自分も部員の一人としてホントに喜しかった。それに合わせて二年は自分一人であったがそれだけに先輩諸氏に可愛がってもらってホントにすばらしい思い出となることであろう。今になって思うのは自動車部に入っただけはホントに正解であったという事であります。

無 題

七一年度生 宝 積 誠 次

自動車部に入ってから早くも二年間が過ぎようとしている。一年の時クラブに入り、初めのころは何をやってよいかわからず、ただ先輩から言われた通りの事をやっていればよかった。このようなことをやっているうちいつの間にかもう三年生になろうとしている。この間クラブで学んだことは何だったろうか。

車の整備もまだ満足にできず、修理するつもりでいたのが結局はこわすことになったことが何度あったことか。自分で考えてみてもなさけなくなってしまふ。また合宿の中心的活動であるフィギアもまだまだ毛のはえた程度でいっこうにうまくならない。そのうちやる気もなくなってしまいそうだ。またラリーをやりたいと思ってこのクラブに入ったのだが、ラリーといっても練習ラリーを数回やった程度で本式のラリーができるかどうかいっこうに見当がつかない状態だ。

こんなことをしながら二年間を過ごし、自動車部に入ってから学んだことといえば授業をさぼることぐらいだ。

まだあと二年間もいるクラブ生活で何を学ぶことができるだろうか。また何をやったらよいか実のところわからない。これから上級生となり、下級生を指導できるかどうかまったく不安だ。

学連での一年間

七一年度生 間 宮 晴 正

自動車部に入部してから六ヶ月、初めての夏合宿も終り、ようやく部になれた頃であった。上級生からの要望で、小生学連なる所へまわることとなった。(本人の意思にかかわらずいつの間にかそうなっていたのだ)

正しく言えば、全日本学生自動車連盟関東支部常任委員、てっとりばやく言えば学連の手伝人ともいおうか。その学連なる所はどのような所なのかと言うと連盟規約によれば、「学生スポーツの本旨

にもとづいて自動車競技及び技術を通じて会員相互の親交並びに人格の陶冶に務め、自動車文化の向上発展に貢献することを目的とする」とある。その目的達成のためにスポーツとしての各種自動車競技の開催及び研究を中心に自動車部に関するあらゆる行事を企画、実施する所である。具体的にはフィギア、耐久走行、ラリー、整備技術大会などを主催する。それらの競技には成績順に得点が与えられ、最も多く得点をかせいだ大学の自動車部が、その年度の全関東総合優勝の栄誉を勝ち取れる。加盟校三十七校の各大学自動車部はその栄誉の座をめざして一点でも多く取ろうと努力するわけである。

さて、小生その学連へ行くことになり、せっかく部に慣れたころなのに一年間直接部活動に加わることができなくなって正直にいうと同輩との競技の面での差や、普段のつきあいがしにくくなるといったことが気がかりとなった。同輩の中には、「学連へまわるくらいなら退部します。」と先輩を驚ろかした者もいるとか。それなのにほとんど人が良いのであろうか(自分で言うのもおかしいが)「ハイ、そうですか。」てな感じでひき受けてしまったのである。自動車競技の主催が主だった活動であるからして事務的な仕事が多くて会社みたいな所だと思って事務所なる連盟室へ行ったが、そのころ学連では全関ラリーと女子新人戦ラリーを直前にひかえていた。そんな訳でラリーの試走へ同行することが初仕事とあいになった。

ラリーの試走によって小生ダート走行に非常な興味を覚えた。それまではラリーについて知識が豊富でなかったが、これ以来、ラリーのおもしろさにとりつかれてしまった。

学連は各大学自動車部の様子がよくわかる所である。どこの大学の自動車部が強く、何々の競技では毎年何々大学が強いとかそういう

ったことがはっきりわかる。我が明学自動車部は関東の大学自動車部の中でも十指に数えられる程実績があるということもわかった。四十七年度の当番校になっていることも、そういった過去の実績があったことなのだ。

学連には大きな仕事もう一つある。交通遺児育英募金という社会的事業である。学連が交通遺児育英会内にある全国学生交通遺児育英募金事務局を引受けている関係から毎年春と秋の募金の二週間前より学連の仕事がひけてから育英会につめ、夜おそくまで全国に募金参加の呼びかけの電話をまわすのだ。自動車を愛する者の一人として自動車部員が募金に参加し協力することはそれ自体交通安全への心がけとつながりをもつ。でも競技が近いと休むヒマなし、まったく連盟員はつらいねエ。

さて、早く学連での一年間が過ぎればよいと思っているうちに半年がたち、五月の全関フィギアがせまってきた。競技の一週間前になると連盟室はにわかにいそがしくなってくる。授業もあまり出られない（出ないといった方が正しいか）。六月には富士スピードウェイで耐久走行選手権があるのでそちらの準備にもとりかからねばならない。そして七月には全関ラリーと競技がたてつづけにせまってくる。参加者の加盟校も忙しいであろうが学連も人数が少ないのでたいへんだ。

全関フィギアの時、本来なら皆といっしょに応援するところだが、主催者側なので影ながらの応援ということで雑用にはしる。（小生学連へ行っても最下級生あたりまえ）。耐久走行の時は写真を取れということにゆっくり見物させてもらった。二つの競技と前後して、ラリー作りのうまいある加盟校に、すでに全関ラリーの

コース作制を依頼してあった。すぐにこんどはラリーの試走である。前年のときは、女子新人戦ラリー、秋の募金と三つをいっしょにやったので殺人的な忙しさであったが、今回はそれほどでもない。

しかし、人間、忙しい時が花だと思う。いままでこれほど、他人と協力して一つのことを成しとげようとはりきった事があまりなかったが、学連で競技を一つ一つこなしてそれが無事終った時、ことばでは言い表わせない充実感を覚えた。参加する方の側でも充実感はあるであろうが、下級生のうちにそれほど充実感を味わえるものではない。

八月に入って名古屋で整備技術大会が開かれた。この整備大会の成績如何で全関総合優勝が決定する明学に対する小生の、またしても影ながらの応援は、見事報われて万々才で幕をとじた。そして十月の女子新人戦ラリーでは女子も全関総合優勝をなしとげた。

人間なんて勝手なものである。早く学連の一年間が終わればよいなどと思っていたのにこの一年間は短かすぎるように感じた。たいへん得た物の多かった一年間であった。ずいぶん自分のためになったと思う。学連の先輩にもよくしていただいたし、学連を通じて知り合った人もたくさんいた。その学連を晴れて円満退社？することになった小生に課せられた事は、学連で得た知識を部活動に生かすことだと先輩は言われた。ヘマの連続で大した大きい仕事をしたわけでもない小生に出来る事などたいしてないかもしれないが、期待に答えるよう努力し、今度は学連の競技に参加者として充実感を味わいたいものである。

皆様の各種自動車
鋳金・塗装・修理の店

斉藤自動車工業所

目黒区青葉台 1-18-2 電話 (462) 2629

コンタクトレンズとメガネ
駐車場のある……

フシミ眼鏡店

品川区上大崎 3-1-6 (目黒駅前)

441-2034・443-1057

AM 9:30~PM 9:00 定休日第1・3木曜日

★目黒駅前に地下1階(駐車場)地上11階の新ビル完成
営業中

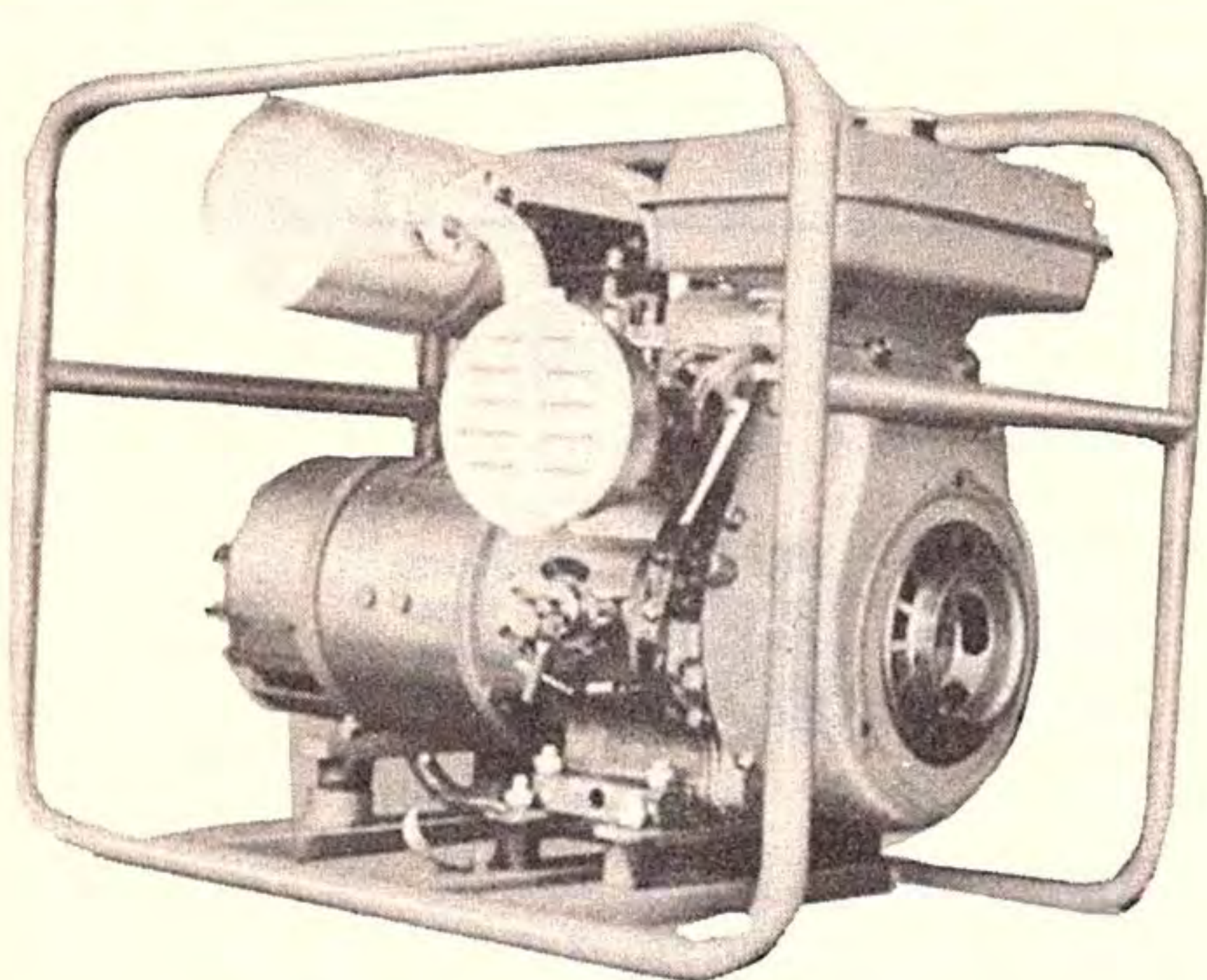
中華料理 味覚の王座 百 番

東京都港区白金台 4丁目 5-5

TEL (441) 5798番



定評ある三菱エンジン!!



各種産業用エンジン及部品

無段変速機

CAVEX[®]ウォーム減速機

流体継手

各種産業用機械

- 取扱いはいたって簡単
- 家庭用電源から非常用予備電源まで幅広く使えます
- 使えばなしのきく三菱メイキエンジン付なので経済的です
- 軽くて丈夫で一番安い価格です
- 防音効果満点で、夜間の使用も安心です

GM-1形 エンジンジェネレーター
(三菱メイキガソリンエンジン搭載)

●
カ
タ
ロ
グ
進
呈

三菱重工業株式会社
三菱自動車工業株式会社

総販売店

極東機械産業株式会社

本 社 東京都港区浜松町 1 丁目 12 番 14 号
電話 (432) 4311(代表)

営業所 盛 岡 0196 (38) 7241
宇都宮 0286 (33) 7207
神奈川 044 (97) 1900



お気軽にどうぞ!

LINDEN スナック

目黒

リンデン

494-0525

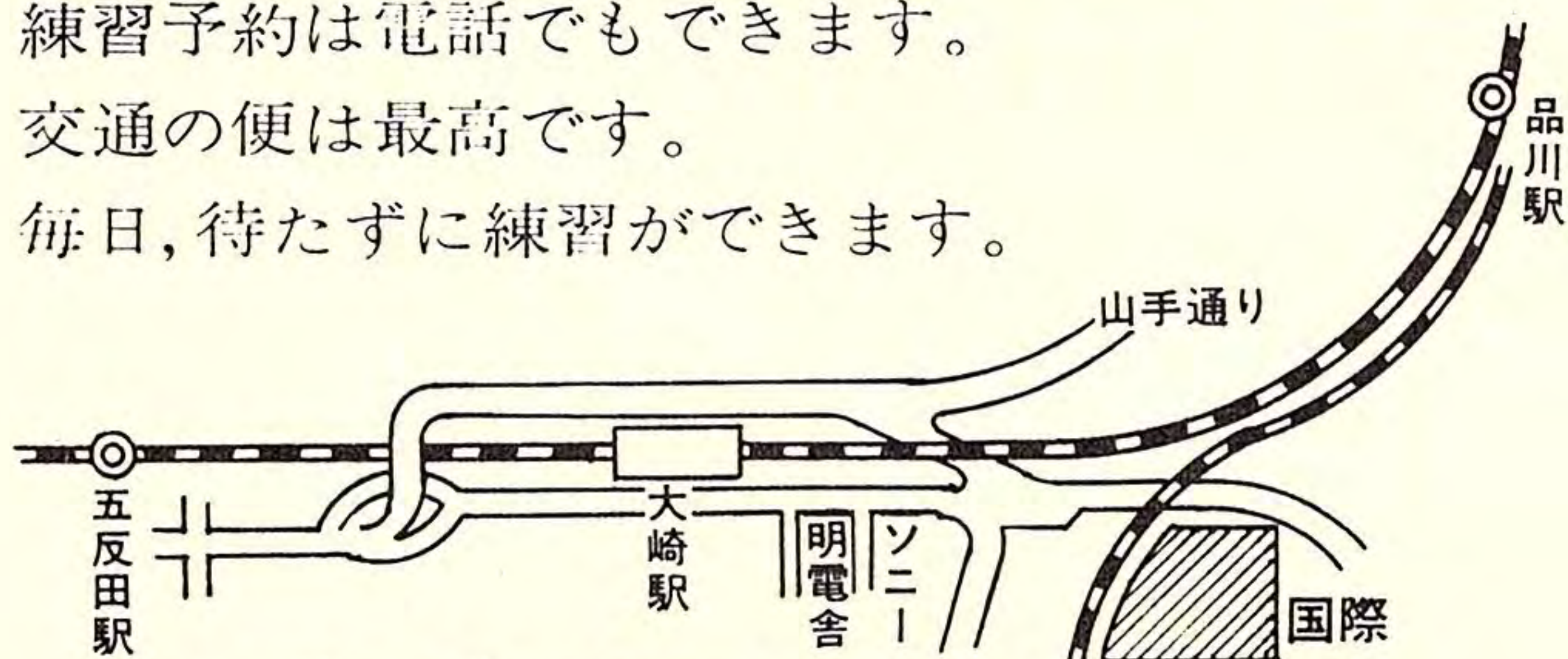
運転練習は当生協指定の国際で

年中無休で営業を致しております。

練習予約は電話でもできます。

交通の便は最高です。

毎日、待たずに練習ができます。



山手線大崎駅西口下車そば



公認

実地試験免除

国際自動車教習所

品川区西品川 1-1-1

☎ 493-5090 (代)



ねじ立て
コストの低減に！
タフレット[®]
(溝なしタップ)

～タップ・ダイス・ねじ転造丸ダイス～

株式会社 田野井製作所

〒140 東京都品川区南大井 5-13-8 ☎ (03)764-2306(代)

目黒駅西口前三井銀行隣

とんかつ

とんき

(491) 9928

自由ヶ丘駅前店 (718) 5006

高円寺北口銀座通り店 (339) 7548

SUNNY 1200
1400

おくるまのことなら

日産サニー共立販売株式会社

目黒営業所

目黒区目黒 2丁目12番地14号

エイムビル1階 TEL (715) 3204

自動車部に期待するもの

七一年度生

中川

豊実

高校生の時、大学にはいつて何をやるかと考えた。利己主義で、時間にルーズなこの頃は体育会のクラブがいいだろうと思った。それに幼少の頃から車に強い興味をもっていた。頃は熊本だが、熊本市内で熊本大学自動車部の看板をつけたバスが走っているのを見て大学のクラブというものは、こんなにかいバスを買える程の財力があるのかと思ひこのことはいよいよ私に自動車部入部の決心をさせた。私が自動車部に入部しようとする時、友だちが言うには、クラブにはいったらクラブの友だちしかできないと言った。私も多少の不安はあったが、そうじゃなくってクラブの友だちもできるのだと思った。二年経過した今、たくさん友だちができた。特に寂しがりやなこの頃は顔見知りの仲間がふえるということは、何よりもすばらしいことなのである。

日本の経済の背景は自動車工業である。生産台数も輸出台数も年々増加する。増加すればするほど私の胸は高鳴るのである。要するに今考えてみると私は、自動車と経済の関係を勉強したかった様に思う。もちろん自動車部だからといってそれを教えてもらえるとは思っていなかったのだが。

クラブというものは何はともあれ人間の上下関係から成り立っている。特に後輩としては先輩との人間関係がまずくなるのが一番こわいことである。先輩からかわいがられるためにはやはり後輩とし

て多少イヤな事にも目をつぶって耐えなければならない。このことは社会に出てから役に立つだろう。しかし、中には極めて無知で横暴な先輩がいて、明らかに人間として忍び難い酷な事を強いる人がいる。そんな時は、クラブにはいつていっているというだけでなぜこんな事にまで耐えなければならぬのかと生きてゆくのがさへ惨めになる。先輩の中にも十人十色で、めんどろみのいい先輩もいれば、ただクラブの先輩、後輩という事務的關係の人もいる。めんどろみのいい先輩に対しては後輩として一生懸命尽くさなければと思ひクラブにはいつている喜びを味わうのである。やはりクラブというものは、単なる上下関係じゃ絶対に駄目なのである。良き人間關係を作らなければ絶対にいい成績もとれないと思う。頃はこうやって二年間どうにかこうにか耐えてこれたのも、いい先輩にめぐり会えたからこそなのである。

無題

七一年度生

木住野

江津子

出だしから何を書いて良いかわからない。クラブへの要望？それとも不満？それとも……もし要望や不満をここで書いたとしたら、それこそ「どうにもとまらない」である。それにもし一例をあげてかいたとしてもそれは、自分への甘えのような空しさを感じる。今私が自動車部あるいはもう少し飛躍してクラブというものをどう感じているのか、この機会に考えてみたいと思う。

私はクラブに出るためだけに一時間半も時間をかけて目黒まで出

かける時などほんとにバカバカしさを感じる時がある。それは時間の使い方に問題があるように思う。クラブ活動をしている時間を有効に使っているならばそうは感じないのではないかと思う。楽しみのためだけとか、レジャー的な気持ちでクラブをしていきたい。これは部員なら誰でも感じることでと思う。お遊びという概念だけならたとえその時間がくだらなくすぎさっても楽しければそれでいいと思う。しかしやはりクラブに何かを求める。それは私の場合、何か一つでも多く自分のものにしたいという気持ちである。クラブに出て何か一つでも新しいことを知ると充実感が湧く。私はどうも『これは私にとって価値があるかどうか』を判断して行動する傾向があるように感じてきた。クラブに入る以前はただ自分の趣くままに、他人に誘われるままに行動していたが……。これもクラブの賜物なのかしら？それはどうあれ、人間に一日の時間ほど平等なものはないと思う。その時間を有効に生かすことが、これからの私たちの課題なのではないであろうか……。

無 題

七一年度生 土 屋 長 之

自分はクラブに入ってもう二年も経ち、四月からは三年生です。つい先日クラブに入ったようですが、もう上級生になろうとしています。

こんなことで四年間に何を学べるだろうか、疑問に思っただけではありません。しかし、自分で気づかないことを自動車部に入っ

ことで学ぶんだと自分に言い聞かせています。又苦勞した一年生のころを考えますと、今の自分はえらくなったなあと思う反面、やっぱり上級生にはそれ相応の気苦勞があるんだなあと思痛切に感じていますし、これからますます感じるんだなあと思っています。

つい先日、追い出しコンパがあった時、四年生の方達はどうかしてあんなに喜んでいらっしたんですかと聞いたところカー・バッヂをもらうんだといっただけでした。冗談だと思うのですが、何か目的があれば続けられると思っています。

クラブを途中で投げ出すものは、経済的理由などと言ってやめていきますが、実際は、自由な時間というものを束縛され、上級生からはいろいろ命令される為だと思っています。又自動車の趣味がなければ続かないものなのでしょう。

しかし、クラブ活動がなくなるとなくなったで退屈で退屈でしかありません。ゆえにやめようとしている人の気持ちがわかりません。経済的理由にせよ、やろうと思えばできるのであって、要はその人にやる気があるかないかにかかわってくるものだと思います。

次に総合合宿は年に二回あり、その他に試合の前に二、三回位あります。我々下級生にとって一番こたえるのは、総合合宿でその中でも一日目が特にです。やはり、休み中に急にするため一日目のトレーニングは、死にそうに苦しいものですが、二日、三日と達つにつけ次第とうすれていく。下級生特に一年生はいろいろ雑用で忙しく、早く二年生になりたいと思ったものです。だから一年生の気持ちは手にとるようになります。

次に自動車部の活動について述べると整備、フィギア、ジムカー

ナ、ラリー、耐久レースなどがあります。普段、整備を重点的にやり、その次にフィギアをやっております。整備は車に乗る人は皆知っておかなければならないことを実践的にやっており、実際非常に役に立ち、コストが安くてすみます。その結果、車検などは部員たちが整備して通します。次にフィギアは、ある決められたコースを走るわけですが、技術と体力を必要とし、体の大きい人が有利でしたが、最近それがなくなり、体の小さい人でも大分やりやすくなってきました。これは自分にとってはいい傾向だと思っています。

入部記

七二年度生 土田 貞之

私が自動車クラブを選んだ理由とて何もない。ただ単に友人が欲しかった。それに自動車が好きだったから。入部してから生活とそれ以前の生活とを比べると、入部後の生活は、縦板に水の如く、毎日が何の抵抗も何の疑問もなく過ぎていった。私が気付いた時、もう九月。前期試験が目の前に迫っていた。試験はヘルメット学生によってこわされてしまった。その時、約一ヶ月の休部があった。その時の私は、時間を持て余し、夢遊病者の様に学内を歩き回っていた。クラブの存在なしには私の生活はあり得ないと思える程、私の生活の中でクラブは大きなパーセンテージを示す様になっていた。やがてクラブが始まり、冬期へと入っていった。冬期間に成るに従い、クラブは暇になって来た。私は、今迄の自分をしだいに振り返る様になり始めた。学校に入った目的、私が大学に入ったらやろう

と思っていた事、それらすべてが後悔となってあらわれはじめた。自動車部を四年間通して得られる物は何だろう。ある人は、物事をやり通した自信だと言い、ある人は、好きな事が最後に行えた事だと言う。しかし、自己を満足させる事が、大学を卒業する事と関係があるのだろうか。大学とは自己満足を得る為の道具でしかないのだろうか。自動車部で自己満足を得る事、それは自動車の事について通と言われる人間になる事なのだろうか。もしそうなら、大学とは遊び場にすぎない存在になってしまふ。大学とはマナビヤであり、文学、政治、経済その他色々の事を大人の目で見、感じ取るところではないだろうか。学校で単位を落とし、クラブにのみ熱中する。ある人から見れば立派な事と言えるだろう。しかし私から見ると、愚の骨頂と言える。そんな事をするなら、始めから整備工場にでも入れればよかったのだ。大学を卒業するからは、大学で得た何かを活用しないなら意味がない。大学を出ても自動車についての学問しか、わからず、趣味も別にないと言う人間が存在するとしよう。クラブ内では、『立派だ。すべてを犠牲にしてクラブに打ち込むとは。』と言えるだろう。しかし社会に出た場合、他の友人と話をした時、文学の話、政治の話、はたしてその人間がこれらの話に付いて行けるだろうか。世の中の人間すべてが、車の事に関して通であればよい。しかしそうではない。車と言うのは生活必需品ではあるが、世の中の一つの分野を司るものでしかないのだ。車がすべてではないのだ。私は、こう言った面で自動車部卒業と言う言葉に不安を感じずには居られない。何故か、クラブとは部落の様なものではないかと、ふと思う事がある。車の事を友人に話しても彼らはそれを受け入れようとはせず、顔をそむけてしまふ。部落出身者はやは

り部落の中でしか生きて行く事が出来ないのだろうか。閉鎖的であり、他からの侵入を拒み、自分達だけの生活を送る部落。その部落を卒業して得られる物は何であり、かつ、その中で培われたものが外部で通用するのであるうか。私は、自動車部卒業ではなく、大学卒業でありたい。大学卒業と言うのは、それなりの教養、知識を身に付けての卒業であり、大学が主となるものだから。一抹の不安を書いてみた。十二月迄ずっと考えていたが結論は別に出なかった。単なる不安。大学に入学できなかった人はどうなのだろう。世間では話のあわないことだらけになってしまふのかなあ……。

入部回想記

七二年度生 倉 茂 孝 子

無我夢中のうちにたってしまった十ヶ月であった。

四月の入学式の直後、ラリー・レース・ジムカーナ と甘い言葉にのせられて入部してしまった私である。

入部してみたものの、私の想像していた自動車部とは大違い。どうやら、私は自動車部の上についていた体育会という三文字を見のがしてしまったらしい。でも、もう入部してしまったのだ。後悔先に立たず。

四月、五月と、土曜、日曜毎に試合等で、時間的余裕は全然なかった。昼休みも、二時間目の授業が終わると、即、北グラへ。素早く体操服に着がえトレーニング。今、走ってきた道を、又、マラソン。(だからいつも、私だけダメージが大きいかもしれない。)

無我夢中のうちに、夏休みになってしまった。クラブ活動もトレーニング納めをして夏休み。しかし、私にとっては全面的に夏休みではなかった。自宅通学の人だけ、週に一回、部車のウォーミング・アップに行かなければならなかった。(何て不公平なのだろう：なんて、よく不満を言ったものだった。)そして、夏合宿。これもどうやら無事に終った。

やっと時間的に余裕ができた。その結果として、同志が二人も減ってしまった。私としても、色々考えてみたが、魅力があるクラブだとは思わないのだが、何か足をひっぱられるような未練が残る。去って行った二人のように踏ん切りがつかなかった私である。

全関東総合優勝を成し遂げ、体育会最優秀クラブに選ばれ、明学でも、存在を認め直されたクラブではあるが、余りにも個性がなさすぎると思う。自動車という現代を代表するメカニクをあやつるクラブとしては、余りにも現代性がなさすぎると思う。

体育会のクラブの斜陽が唱えられ、どのクラブでも部員不足に悩んでいる現在、自動車部でも、決して例外ではないと思う。現に、十ヶ月以上も苦楽を共にしてきた同志が、三人去って行くこうとしてゐる。理由は何にしろ、残されたのは、遂に四人となってしまう。私は、残された一人として、色々考えさせられた。いくら考えてみても結論がでない。また、すぐ結論をだす必要もないと思う。ただ今言えることは、このままの状態でいくと自動車部は消えて行ってしまうということである。

この辺で、体育会自動車部に革命でも起こしてもよいのではないだろうか。

夏合宿回想録

七二年度生 渋谷 義孝

今のぼくにとっては、懐しいとしか思うことの出来ない夏合宿も、あのときは、本当に毎日が辛くてどうしようもありませんでした。特にトレーニングのときは、もしかして、ぼくはこのまま死んじゃうんじゃないか、とさえ思ったものです。

四年生の方たちが毎日、次々と新しいトレーニング方法を僕達に実践させてくれました。

うさぎ跳び、全力疾走、アヒル歩き、倒立しての腕立て、止めたままの腕立て、上体起こし、馬跳び……。

トレーニングをしている内に、軀中から汗が吹き出し、それが、バセドウ氏病的にカッと見開かれたぼくの眼に、何のことわりもなしに凶々しく入って来るのです。すると、ぼくの眼の前の床板が陽炎のように歪んで見え始めるのでした。そのトレーニングが終わると夕食の時間がやってきます。この食事時間をいかにして巧みに使うかが、僕達一年生に与えられた試練でした。つまり、時に僕達男子は、先輩の方達を横眼で盗み見、その一方、御飯を無理矢理胃袋に押し込み、先輩の方達が一膳食べる間に二膳食べねばならなかったのです。これは、相当の技術を要しました。食べるというより、ただ口に押し込むという方がより正確な表現でしょう。この癖が未だに直らず、ぼくの食事時間は超特急並みのスピードです。しかし、今も不思議でならないのが、女子の食事の量です。井に半分足らず

の御飯で、良くあの合宿を通せた、と違って、不思議でならないのです。きっと、何か秘密があるのに違いありません。もしかして、男子に隠れて、夜、こっそりお菓子なんかをポリポリ、パリパリ食べていたのではないのでしょうか。

山中湖一周マラソンなんか何とか完走することができました。我ながら、あの魔の十四キロを良く走り通せた、と感心した位です。何度も歩こうと思いましたが、前に行くバスから女の子に声援され、疲れたところを見せてはならじ、と頑張り、必死の思いで完走したのでした。

もっとも、合宿の終り頃風邪をひいてしまい、その後二週間程、死ぬ苦しみを味わいましたが、

でも、今は、夏合宿のことは何か遠い昔のように妙に懐しく思えるのです。合宿が終わり、北グラウンドに帰って来たとき感じた気持ちも今は、もう薄れてしまいました。

ぼくにとって、夏合宿とは一体何だったのだろうか……？

合宿記

七二年度生 長島 きみ子

私にとって、合宿とは初めてのものではありませんでしたが、それでもやはり大学の体育会の合宿、男女いっしょの合宿ということ、漠然とした不安を抱いていました。それに、なんといっても十日間という期間は、私にとってあまりにも長い期間に思えたのです。

四日間の合宿整備と、合宿のためのトレーニングを終え、いよいよ出発の日が来ました。配車は、テンペストでしたので浮き々しながら車に乗り込んだのですが、初めのうちは、なんとなく上級生がこわくて、あまり話もできませんでした。合宿前から二年生に、今までやさしかった先輩も合宿になるとがらっと変わって陰険になると聞いていたので、やっぱりそうなのかなと思っていたら、途中から次第に笑いが出るようになって、内心ほっとしました。天候はあまりよくなく、山中湖に近づくにつれて次第に濃い霧が出て、湖北寮に着いた時にはほとんど雨でした。荷物を整理すると、さっそくグラランドに行ったのですが、そこは五、六十センチもある草が一面にはえていて、こんな所でほんとうに練習ができるのかと思いました。そこで、第一日は草むしりから始まりました。

夕食、総合ミーティングなどが終わり、やっと寝る時間になると疲れているのに、やはりなんとなく神経が高ぶっていたのか、なかなか眠れませんでした。

起床は六時、トレーニングは六時十分から。一年生は十分前に二年生、五分前に三年生、ジャストに四年生を起こさねばならないので、実際には五時半頃起きなくてはなりません。ところが、私達は最初の日から失敗をしてしまいました。というのは、目ざましをかけたのですが、どういうわけか止める名人がいて再びみんなやすやすや……。恥ずかしいことですが、一年の男子の戸をたたく音でようやく目がさめて、あわてて外へとび出したのですが二年生はすでに整列していました。思ったとおりトレーニング後、さっそくおこられました。でも、何のための起床時間だかわかりませんし、時間的に無理があり、不合理な面も多分にあったように思います。

トレーニングは、朝はそれほどきつくはありませんでしたが、私の最もきらいなマラソンだけが憂鬱の種でした。それが終わると、一年女子はすぐ床上げ、掃除、食当、男子は仕業点検と分れますが、人数が少ないのでとてもたいへんでした。とにかく、この合宿は時間々と追いまわされたことが一番印象に残っています。

グラランドまで車で二十分程でしたが、その間が楽しく今日はどの車に乗っていかうかといつも迷いました。練習はフィギアばかりで、毎日車種をとりかえられたので、早く車種を決めてほしいと思いました。他の人がやっている時は、熱さのためか、眠けのためか時々ボーッとして目をあけているのもつらくなることがありました。そんな時、無免練習に呼ばれるとうれしくてとんでいったものです。夜の個人ミーティングでは、だんだんフィギアがわかってきましたし、車種によって雰囲気が違うのでこれも楽しみの一つでした。

合宿は、最初の三日、四日めまでが長くつらく感じましたが、後半はあつという間に過ぎてしまった気がします。ソフトボール大会、OB親睦会などはとても楽しい思い出でした。また、タイムレースでは、一年生はボックスのみでしたが、わずかな差でも一位になれたことは私に意欲を持たせました。

長かった合宿も、とうとう最後の晩になり、夕食後のファイアーストームは、忘れられない思い出となるでしょう。最後に歌った校歌と応援歌の響きは、今でも胸にジーンとくるものがあります。これは運動部でなければ味わえないものであると思います。とにかく私にとっては思い出深い合宿でした。

クラブについて

七二年度生 福島 正明

自動車部に入って、早や一年たとうとしているが、未だ、もうすぐ下級生が入って来るといふ感じは全然沸いてこない。

しかし自分の本当の気持ちとして早く一年生の状態を脱けたい、なるべく早くといふ意識はあることは確かである。その動機は、ごく、単純であるが、クラブの雑事から、ある程度離れられること、そして少しでも、自動車部らしき活動に加わられるということである。そのためにはやはり下級生が入ってこなければならぬのだが、まだその上級生としての自覚がわいてこない。まあ、これはそのうち自然に出てくるものなのかもしれない。

さて、話は変わるが、この一年をふり返ってみると、かならずしも、自分として満足には活動できなかったという反省の念がでくる。それは自分のクラブに対する気持、いわゆる精神的な態度が完全なものでなかったということであるが、上級生になったら、こんな生半可なことではいけないのかもしれないが僕も人間である。少しはゆるしてもらわねば……。

それから印象的なのは、クラブの同級生、上級生と飲みに行ったということである。これだけは徹底して、朝の太陽が昇ってくるまでのみつけ、始発の電車にのって、帰るなどということとはしばしばであった。これがまた非常にたのしく、夜がふけて、あのムッとした雰囲気の中で飲みながら討論し、またくだらないことをし

やべって……。これが青春でなくてなにが青春だ！といいたいが、いつも虚しい。きっと女の子がいけないのだ。ちっとも僕のことをかまってくれないで。世界の人口の半分は女の子だっていうのに……。それをクラブのトレーニングでまぎらわしている。先輩方はなんといいかたなのであろう。僕も先輩方のことをみならって、下級生にどんどんトレーニングをさせてやろう。そしてこの世の悩み、くやしさを除き去ってやるのだ。それが自分の使命である。僕はそれを「丘」できいたのです。

またふざけてしまったけれども、自動車部の栄光はつぶしたくない。またつぶしてほしくないと思う今日この頃である。

合宿の一日

七二年度生 原田 博

一九七二年八月〇日、合宿も残りわずか。朝五時三十分、眼が覚める。起きるには早すぎる。五時四十分そろそろ起きなければ……思うや否や「ガバッ」と飛び起きる。五時五十分二年生を起こす。五時五十分三年生を起こす。六時〇〇分四年生を起こし、すぐ外へ出て整列する。二年生、三年生、四年生全員が揃い六時十分朝のトレーニングが始まる。喉が干からず声が出ない。「声出してんのかよー！」と怒鳴られる。必死で声を張りあげる。それでも怒鳴られる。六時五十分トレーニングが終わる。四年生が部屋へ帰って行く。そして三年生、二年生が帰って行く。ぼくたち一年はすぐに、仕業点検、布団あげ、清掃、食膳の用意をしなければならな

い。慣れたせいばかりかあまり忙がしく感じなくなった。それでも休む暇はない。食事の用意が整うと、まず二年生を呼ぶ、二年生が全員揃う。三年生を、そして四年生を呼ぶのである。食堂に全員が揃うまでに十分以上の時間がかかる。それだけぼくたちの休める時間が減るのだ。そう思うと腹が立ってしょうがない。疲れているせいかもしれないとした事でもすぐ腹が立つ。全員が席に着くとトレーナーが「黙禱！」と大声を張り上げる。食堂が静まりかえる。数秒後トレーナーの「いただきます！」の声で食事が始まる。立ったり座ったりしているうちにいつの間にか食事は終わってしまふのである。食事が終わるとまず四年生が食堂を出ていくのだが、この時我先にと争って出ていくのである。何故か？便所へ行くのである。おもしろい光景だ。こんな変な競争も四年生だからこそこできるのだ。上級生が食堂から姿を消すと、後片付を始め、これを終わると部屋へもどって一息。これもつかの間すぐスタート準備にかからなければならぬ。スタート十分前には一年は整列していなければならぬのである。八時三十分全員が車の前に整列。副将「これから午前中の練習に出発するけどよ、気ィ張っていけよ。気ィ張ってねえとぶっ倒れるからな。」（たしかこんな感じの言葉であつたと思う）「乗車」の言葉でぼくたちはフソウの荷台に乗りこんだ。練習場へ着くまでの時間はわずかではあるが、相かわらず楽しいものだった。女の子がいると荷台にいる全員が「ウォー！ワー！」と声を張り上げながら手を振るのである。ただこれだけのことなのだが気分がウキウキしてくるのである。この時ばかりは先輩も後輩もない。みんな「男」なのである。「男あれば苦あり。」もう練習場に着いてしまった。車種別に別れて練習が始まる。ロック、幅寄せ、ボックスなど車種

によってさまざまなことをやっている。車に乗っていない時は立つばなし。立っているのもやっと。声を出すと頭にガンガン響くのである。それでも声を出さなくてはならない。声を出していないと立ってられないような気がする。昼も過ぎ、午後の練習が四時に終わる。これから魔の時間。午後のトレーニングがはじまるのだ。トレーニングの間は必死でやるだけ。トレーニングが終わると一安心。それもつかの間、寮までマラソンで帰るのだ。寮に着くともうクタクタ。何もやりたくない。でもまだやらなければならぬことはたくさんある。夕食の用意、ミーティングの準備。総合ミーティング、個人ミーティングがおわると、三、四年生の布団を敷きに行く。これがおわるとあとは自分たちの布団を敷いて、布団にもぐってタバコを吸う。皆何もしゃべらない。しゃべるのもかったるいのだ。やっと今日が終わった。あともう少し、目黒のネオンが懐かしい。十時ちょうど、消燈の時間だ。電気を消して目をつぶる。疲れしているのだが眠れない。消燈時間は絶対厳守。これを破ると恐ろしいのだ。だから十時をすぎると人の声は絶対に聞けないのである。………耳に四年生の声が聞えてくる。耳の錯覚だろうか………？



大

か
い
ば
か
り
さ

能ではありません

車 も

かといってサニーはきゅうくつな
車ではありません。サニー城南の
ショールームでお確かめください。
本社ショールーム ☎453-4381

会社 も

かといって日産サニー城南はそう
小さな会社でもありません。あな
たも私達と一緒に働きませんか？
サニー城南・人事課 ☎453-4381



★……良き時代からメカニックの
パートナーです

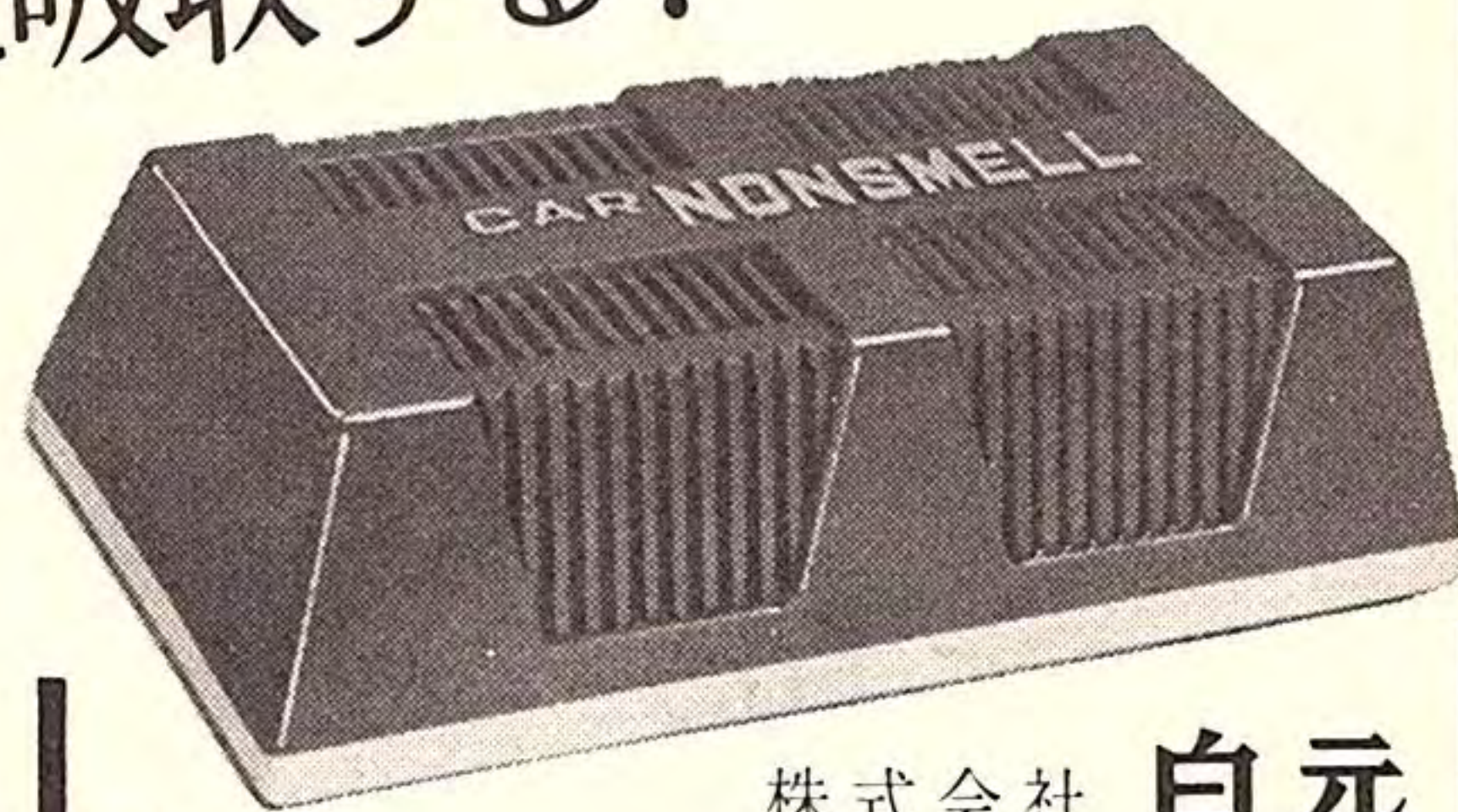


萬歳自動車株式会社

本社 〒105 東京都港区芝2-31-19
TEL 452-5151(大代)

車内の悪臭をワイドに吸収する!

〈カーノンスメル〉は、車内の不快臭を消す〈活性炭〉と
排気ガス中の最も有毒な一酸化炭素を化学的に収着無害に
する〈特許 ワッスムD〉を主剤とした脱臭剤で、これは
〈カーノンスメル〉だけの特長です



CAR NONSMELL

株式会社 **白元**

東京・台東・東上2-21-14

●薬局・デパート・ガソリンスタンドでお求め下さい

1年間有効 ￥500

やきとん

まこちゃん

御宴会20名様まで承ります

目黒権之助板新仲見世通り

TEL (491) 8764

2F 洋酒ホール

サントリー東京

男性コーナー

女性コーナー 目黒名物

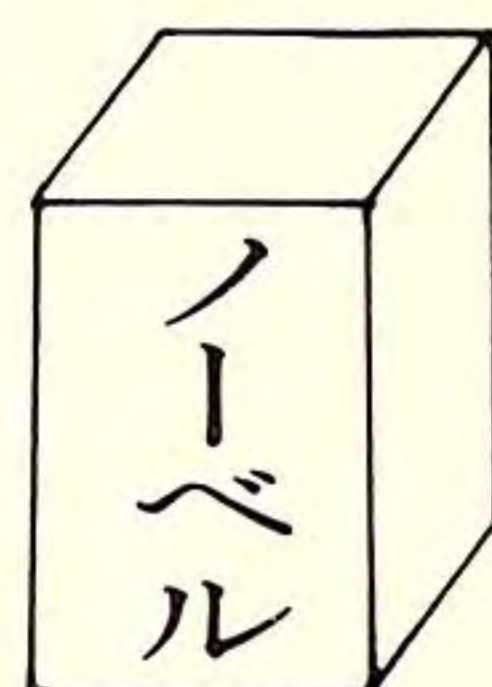
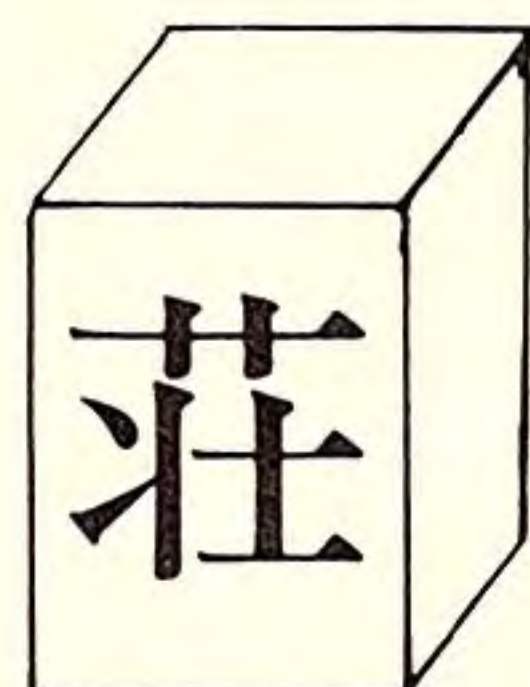
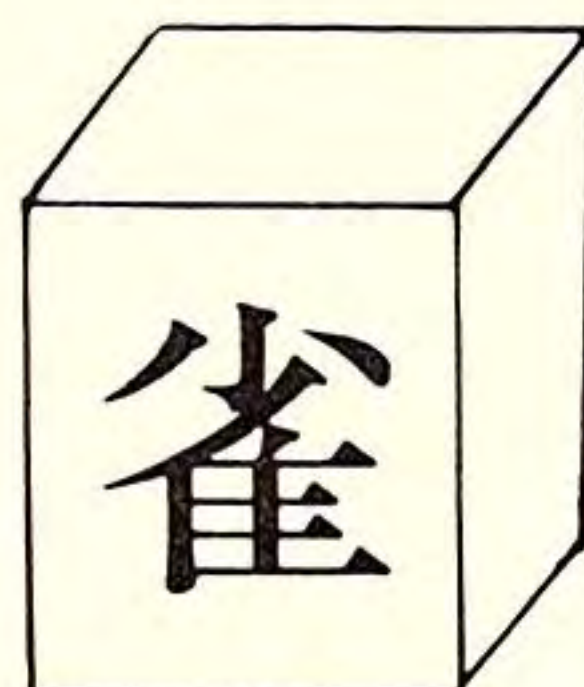
目黒のサンマ

その他



TEL (492) 5271
5272

3F



一	般	¥70
学生割引		¥60

TEL (493) 0823・0833

明治学院指定給油所



各種オイル，アクセサリーその他
日本石油二本榎西町給油所

木村屋商店

東京都港区白金台 2-10-2

ニュークリンビュー

●油膜とりにクリンビュー

雨の夜フロントガラス表面（ワイパー下）に油膜がギラギラしてとても運転しにくいですね。クリンビューをひとふきすると油膜は全然つきません。

●くもり止めにクリンビュー

窓ガラスの内側に塗るとくもり止めになり長時間保ち、塗った後がキレイです。布にスプレーし均一に塗布してください。

●消滴剤にクリンビュー

雨の日に窓ガラスの外側に塗ると水滴が付着しないのでよく見えます。特にサイドミラーにご使用下さい。布にスプレーし塗布します。

●ご使用前に缶を良く振ってからお使い下さい。

注意

1. 温度40度以上となるところに保存しないこと。（車内では直接日光の当るところに置かないで下さい。）
2. 使用後火中に投じないこと。

L.P.G. 使用

エアゾール缶 180cc入 ￥ 600

製造発売元



タイホー工業株式会社

東京都港区高輪2丁目21番44号 TEL(445)6311(大代)

ふぐ・天ぷら・割烹

あづま家

御宴会、御商談に御利用下さい

品川区上大崎二ノ十三ノ三十五

ニューフジビル二階
☎(四四六)六二六五

お食事・御休憩に
うま・く・で、安・い

大久保だんご総本店

清正公前

47年度自動車部成績

全関東学生自動車運転技術競技大会

男子団体 十位

女子団体 四位

固人戦 四位

全関東学生自割車耐久走行レース

男子 十二位

女子 三位

全関東学生ラリー選手権大会

男子 七位

女子 二位

全日本学生整備技術競技大会

予選 男子 八位

女子 八位

本選 男子二十二位

女子 七位

全日本学生自動車運転競技選手権大会

男子団体 十九位

女子団体 三位

個人戦 十三位

自動車部規約

第一章 約 則

第一条 本自動車部は明治学院大学体育会自動車部と称す。

第二条 本自動車部は本部を明治学院大学学生ホール（C・H）におく。

第三条 本自動車部は自動車に関する技術、技能を把握し、かつ体育的訓練を通じて部の親和を計り学生自動車競技の進歩に寄与することを目的とする。

第二章 組織及構成

第四条 本自動車部は明治学院大学体育会に属し、全日本学生自動車連盟に加盟する。

第五条 本自動車部は下記の役員をおく。

部長	一名	会計	一名
監督	一名	記録	一名
主将	一名	指導	二名
副主将	一名	車輛	二名
主務	一名	学連	二名

以上役員を以って役員会を構成する。

第六条 部長は本校教職員をこれにあてる。

第七条 監督は部員総会にて選出した当部先輩をこれにあてる。

第八条 役員は役員総会にて選出し任期は一ケ年とし毎年十月に改選する。但し重任を妨げない。

第三章 権 限

第九条 部長は当部の最高責任者として部の運営を統括する。

第十条 主将は部全体の代表者であり、部一切の運営を統括する。

第十一条 副主将は主将を補佐し主将に事故ありたる時はその代りを務める。

第十二条 主務は一切の渉外事務を担当し、又会計を補佐し部全体の財務関係その他の事務を行う。

第十三条 会計は主将を補佐し部一切の会計を担当する。

第十四条 指導は主に無免許者の指導を担当しその練習をコーチする。

第十五条 車輛は各部車の安全運行を期し、部車に故障のありたる時は直ちに修理し、又工具の備品等の管理をする。

第十六条 記録は部一切の行事を記録し、資料作製及び保管にあたる。

第十七条 役員会は当部の議決機関として、運営その他の部活動に関する事項を審議し、特に重要な事項に関しては部員総会の議決を必要とする。

第四章 会 合

第十八条 役員総会は当部の諮問機関であり原則として月一度の定例会合を開き、その決議に関しては過半数の賛成を必要とする。

第十九条 主将は次の場合、役員総会を開くことが出来る。

- ① 役員の要求があり、主将がこれを必要と認めるとき
- ② 部長あるいは監督の要求ありたる時

第二十条 部員総会は当部の最高決議機関であり、その成立は部員の半数以上の出席を必要とし、決議に関しては出席部員の過半数の賛成を必要とする。

第五章 会計

第二十一条 当自動車部の会計年度は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第二十二条 当自動車部の費用は学友会費、部費、入部金、OB会費その他の収入をこれに充てる。

第二十三条 会計は会計年度終了と共に当年度の会計報告を部会に提出し、承認を得なければならない。又部長、主将、役員会の要求があった時会計は公表しなければならない。

第六章 部員

第二十四条 本自動車部に入部し得る者は本学院第一学部に属する学生で夏期休暇前に入部を希望したる者に限る。

第二十五条 部員は毎月十日迄にその日の部費を会計に納入しなければならない。但し正当なる理由ある者で主将が認めた時はこの限りではない。その場合は書面を以って予め会計に提出する必要がある。

第二十六条 当自動車部への入部は募集に応募し入部届を提出し役員会の承認を得て入部費を納入し、正式に部員としての資格を得る。

第二十七条 正当な理由なくして部費を三ヶ月以上滞納した時は後記罰則を摘要されることがある。

第二十八条

(一)、休部する者は休部届を主将に提出し、その承認を得なければならない。

(二)、休部者はその月までの部費を必ず納入せねばならぬ、さもなければ休部届はその効力を失う。

(三)、休部は原則として六ヶ月以内とする。

(四)、一たん納入したる部費その納入金はいかなる理由があっても返済しない。

第二十九条

部員は部活動に参加しなければならない義務を有するがもし正当なる理由があつて参加できない時は、書面を以って主将にその旨を届け承認を得なければならない。退部を希望する者はその旨を書面を以って主将にだけ承認を得た後退部期日迄の部費を完納しなければならない。

第七章 罰則

第三十条 部員にして下記の名目にかかわる行為をした者は役員会議の議決により主将はこれを除名、又は謹慎を命ずることがある。

① 部規約に違反した者

② 主将又は副主将、役員会の許可なくして車輛を運行し故意に又は重大なる過失により部車を破損し又は事故を起したる者

③ 二ヶ月以上無断で部活動に参加しない者

④ 当自動車部たる体面を汚し部の統制を乱したもの、部車を運行し事故を起した者は、主将、副主将、

主務は関係者と協議の上、その損害の一部又は全部を出させる事がある。

第八章 附 則

第三十一条 本規約の改正補足は役員会の提案により部員総会に於て過半数の同意を必要とする。

第三十二条 本規約以外に必要な細則はその都度これを定めることがある。

部車使用規則

第一条 本規則設置の目的は部車運行の統一を計り、運営を正しく且つ公平にし、又事故をよくすることを以って定める。

第二条 部車使用の種類、部用と公用

① 部用とは部の行事、競技、練習、試運転、その他活動に関するものをいう。

② 公用とは学校関係、校友会その他からの要請ありたる時をいう。

第三条 部車を使用する時は主将または役員 of 許可を得る。但し特に緊急を有する時及有資格者はこの限りでない。

第四条 部車運行条件、部車運行については部員二名以上の乗用を必要とし、運転者を責任者とする。但し緊急を要する時はこの限りではない。

第五条 緊急の用件にて主将又は役員 of 許可なくして車輛を運行する時は必ず行先、目的、所要予定時間を明記して行くこと。
部車を使用する時は次記の事項は必ず守ること。

① 工具及び故障有無の点検整備

② 交通法規の厳守

③ 使用後の清掃

④ 事故が起きた時、運行責任者はその状況を判断し、最も適切な措置をとること

⑤ 長距離操行の時は必ずデーターをとること

MG 第四号に向けて

―後記にかえて―

ほんとうに、ようやくと発刊にこぎつけたという感じのこのMGも数えて第三号、まだまだこれから雑誌だろうと思います。そこで、この第三号を御一読下さいまして、いろいろ不備な点など、御意見、批判があることと思いますが、今後の為にも、それらの御意見をお聞かせ願えたら、幸福と思っております。

なおMG第二号に、OBの近況報告を載せたらとの意見がございましたが、これは第四号を発刊する後輩にお願いしたいと思っております。

そこで、このMG第三号を発刊するにあたり、自分達が苦勞した点や、経験してみての意見を後輩の為に述べておきたいと思ひます。

まず第一に、発刊の予定時期は活動を開始してから最底三〜四カ月、できたら半年後、つまりそれだけの時間が必要であるということである。スポンサーを集めるにしても、原稿を集めるにしても、絶対に予定どおりには進まないものである。

第二に、原稿依頼は期限を長く、二カ月ぐらいとり、字数、用紙はもちろん、題もこちらから指定しておく必要がある。「何についてでも」という事ではなかなか書きにくいもので、したがって原稿の集まりも悪くなる。さらに原稿回収については、期限の一〜二週間前から確認の電話をかけておき、期限が来たら、回収できるまで、毎日でも催足の電話をかけること。そうでもしないと、とても原稿回収はおぼつかない。ここで第三号の原稿回収率は五〇パーセントに満たなかったことを告白しておこう。(今後はこの様な

事のない様に。)

第三にスポンサーについてであるが、最初に必ず目標額を算出しておくこと。今度の場合は一ページ一万円とし、半分ごとに、その半額として、最底二千五百円とした。とにかくスポンサーに関しては、数多くあたるのが絶対に必要である。なお、スポンサー集めの時期としては、年末と二〜三月の間はさけた方がよい。年末はもちろん忙しくて相手にされず、二月〜三月は、前年の四月に計上した広告費なるものを使いつくしてしまっている会社が多くて、もらいにくいのである。したがって活動の時期としては、春の試合シーズンが終えた頃より開始するのが良いと思う。

以上思いつくままに書きつらねてきたが、結果的に、最初に充分な計画を立案しておくことが最も重要な事と思われた。

以上の事が参考になれば幸福であるが、今後ともりっぱなMGを作り続けてほしいと願っている次第です。

最後になりましたが、このMG第三号を発刊するにあたり、多大なる御協力をくださいましたOB・諸先生並びに各会社の方々にあつくお礼を申しあげます。次第でございます。

本当にありがとうございます。

昭和四十八年三月 正田 一 明

気軽な価格で、気軽にする！

〈中古車〉はいつでもあなたの予算に合った
クルマがお求めになれます。

●お求めは《東京日産》中古車販売所へどうぞ… 〈日曜・祭日も営業〉



《中古車販売所》日曜・祭日も営業

足立	☎ 883-1125	東武「竹の塚駅」東 日光街道
小岩	☎ 692-0070	蔵前通り新小岩自動車教習所前
江戸川	☎ 689-3155	堀船三丁目都バス江戸川車庫東側
大崎	☎ 492-4613	目蒲線「不動前駅」ぎわ
自由が丘	☎ 718-9261	目黒通り産業能率短大前
烏山	☎ 309-3331	京王線「芦花公園駅」北甲州街道
田無	☎ (0224) 62-3777	新青梅街道 田無三中西
立川	☎ (0425) 23-5288	市役所南
八王子	☎ (0426) 42-7224	大和田橋東詰
板橋	☎ 931-1023	東武東上線「上板橋駅」南徒歩3分川越街道

車で明るい暮しをつくる

東京日産

東京日産自動車販売株式会社



西武運輸株式会社

渋谷主管店

(719) 7312～3

目黒区青葉台 3—21—12

軽自動車から大型貨物自動車まで
日頃の研修の成果を試してみませんか。

部員名簿

72	71	70	年度	役職	名前
記録	学連委員	主将			
中村 美香	車輜補佐	車輜			高橋 良次
原田 博	副務	代表学連			
	車輜補佐	會計			正田 一朗
	車輜補佐	主務			木村 真
	OB係	指導			岡部由美子
	女子主任	指導補佐			宝積 誠次
	間宮 晴正				
	土屋 長之				
	木住野江津子				

執行部

福島 正明
井上 正幸
渋谷 義隆
八木 茂樹
土田 貞行
長島きみ子
倉茂 孝子

O・B住所録

52	年度	役職	名前
			美沢 孝利

OB会長	土倉 弘
------	------

依田 正明

渡 匡男

林 精彦

北島 行雄

朝比奈 一郎

海老原 正一郎

土井 裕

梁瀬 朝光
久美子

横山 邦彦

田中 和吉
谷ヶ崎 陳雄
(旧姓 森)

西村 哲美

三枝 忠男

56

田中 正行

56

瀬々 洋司郎
ヤーゲマン
田辺 静子

57

幹事

江尻 玲子
本保知 真子
福田 稠徳

小笠原 公子

幹事

田村 雅明

幹事

石田 廉

山岸 洋子
(旧姓 林)

本田 陽子
(旧姓 若林)

58

幹事

杉浦 浩司
康江

58

幹事

河合 正志

幹事

更科 隆夫

幹事 西沢 利祐

近藤 茂弥

田中 稔

加瀬 聖

足木 堅吉

福田 暁

斉藤 信哉

坂井 利晴

佐久間 健

大西 恒彦

設楽 修

59 幹事 福岡 進

幹事長 小林 征而

志保子

春山 博道

遠藤 進衛

英美子

59

小林 絃太郎

中森 幹夫

高尾 桂子
(旧姓加藤)

松岡登紀代
(旧姓近藤)

60 幹事 長野 祐三

宮崎 之男
紅子

60 幹事

兼松 孝夫

岸田 傑

佐藤 正彦

谷口 美次

田辺 子
(旧関川)

渋谷 弥生
(旧加藤)

61 幹事

山田 祥三

川瀬 功

幹事

小林 孝郎

幹事

和田 義一
多恵子

61

吉田 順喬
大塚 邦彦
美佐子

62 監督・幹事

八代健一郎

小木 重男

望月 範子
(旧川崎)

立沢 佑子
(旧渡辺)

池田 邦夫

綿引 定房

船田 幸男
南子

高橋 邦嘉

62 幹事

千葉 範雄

幹事

斉藤 潔

柴田 昌弘

三上秩恵子

		64		63		63		
	幹事				幹事	幹事・コ 1子		
小林 英夫	小堤 兵吾	世取山裕郎	齊藤 浪子 (旧草野)	近藤 苑子 (旧窪田)	末村 重昭	樋田 謙吾	古家 泰子	田中美恵子 (旧梶原)
			駒崎 光子	板倉 喜江 (旧中畑)			加藤 丈人	腰塚 忍 (旧森安)

65			65		64			
幹事				幹事	幹事	幹事		
田丸 英一 光子	川俣健治郎 内田 実	樋口 雅一	綿引 定範	山元 一典	望月将一郎	井上 直文	中右 秀紀	福岡 満雄
								三上 勲

幹事

吉野 正幸

幹事・ヘ
ッドコーチ

福本 喜保

陶山 恵造

幹事

梅田 敏明

乾山 知之

幹事

福島 正通

熊沢 香一

幹事

田口 由之

古市 尚士

奥津 正
端枝

幹事

小幡 季暁

角田 暁生

幹事

岩瀬 恒彦

小島 啓史

石井 哲夫

島田 省治

鈴木 豊

高見沢 坦

松本 一昭

滝本 洋子
(旧小林)

深尾 典子

近藤真知子
(旧森坂)

池田 英子
(旧大川)

田中 実

池田 和夫

67

幹事・
コーチ

67

海原 正弘

幹事・
コーチ

田中 成佳
(旧名徳良)

幹事・
コーチ

坂井 厳

幹事・
コーチ

筒井 公子

明石 敏夫

68

幹事・
コーチ

小林 滋幸

貞住 文雄

伊藤 邦夫

幹事・コーチ
紺野 英雄

68

矢島 昭博

谷崎洋一郎

幹事・
コーチ

竹本 慶三

杉山佐恵子

松島 初代

加藤 堅司

村里 忠充

久米 誠

松川 健治

井上 幸二

山本 俊介

小原 豪裕

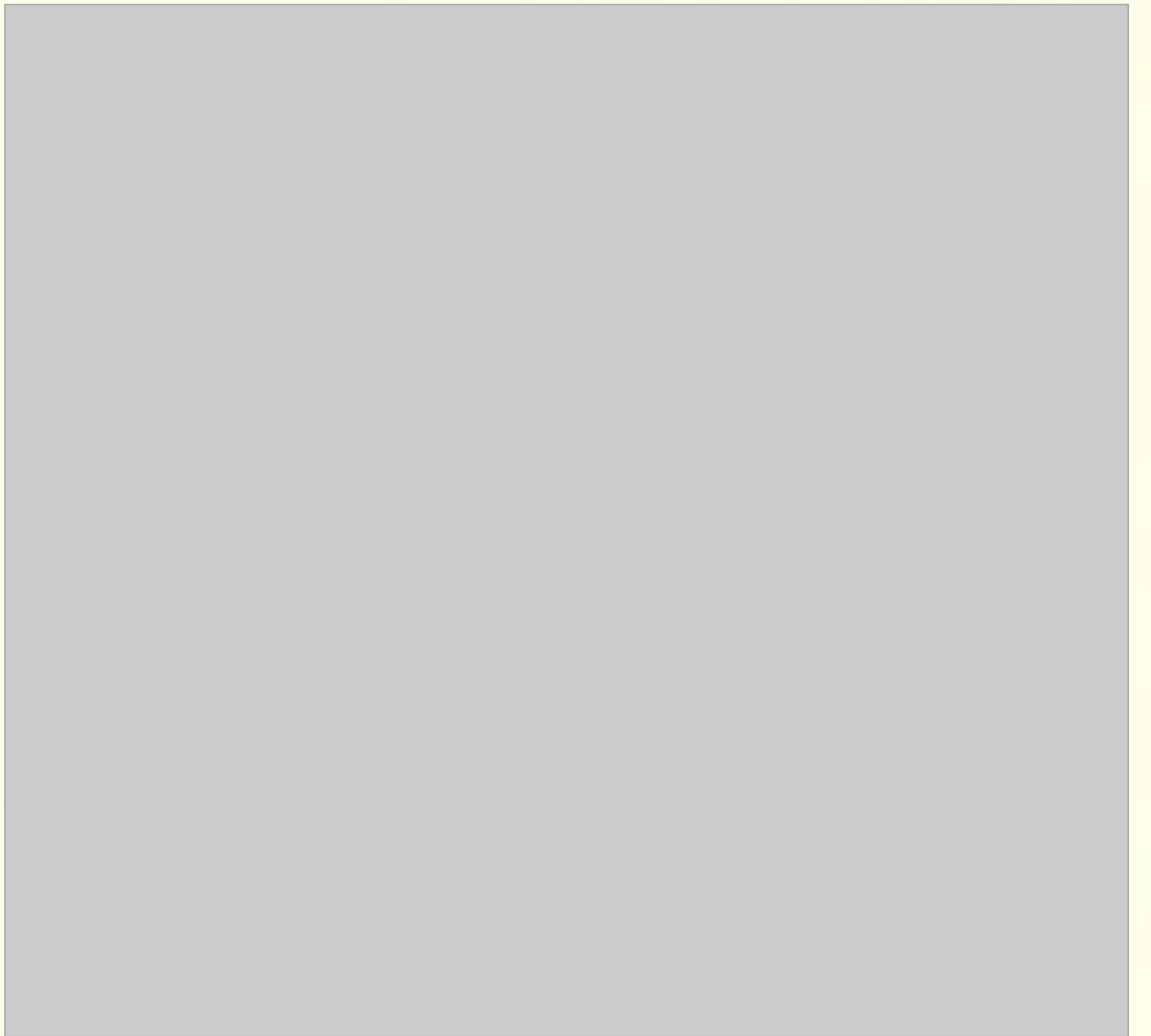
高橋 功

井坂 雄二

小林由紀江

原 悦子

及川せい子



明治学院大学体育会自動車部

港区芝白金台一―二―三七

発行責任者 高橋良次

編集責任者 正田一明

印刷所

株式会社 日英

住所 東京都千代田区内神田一の三

TEL (二九三)〇五二一(代)

